

東京都心北部におけるキシノウエトタテグモの生息分布調査

鈴木成生*

キシノウエトタテグモ *Latouchia typica* は、神社、寺院、旧家の庭に多く、地中に縦穴（崖地では横穴）を掘り、入口に扉をつけるクモで（新海・高野, 1986），比較的明るい、家の土台石のきわ、境内のふみ石のきわなどで見受ける（八木沼, 1986）。

明治時代に東京大学構内で本種が始めて採集・記録（岸上, 1889）されてからの100年の歳月にわたる極度の環境変化で、その後の生息状況はどうなっているか、また現在でも数的に研究材料として利用可能かどうかを知る目的で本調査を行った。

調査方法

調査は1990年12月～1991年2月に行った。

調査地区は先人の初採集地を含む東京都心部北部の大学、公園、史跡・庭園、社寺、墓地等一般の立ち入り可能な26地区（a, b の2亜地区に分け2回の分布調査を行った場所が4か所あり、計30地区）とし、人家は除いた。

調査所要時間は各対象地区とも約1時間を設定したが、各種事情により30分未満で打切り、かつ本種の生息が確認できなかった場合は調査不十分として記録した。

事前に行った予備調査の結果、今回の対象地区では通常、公園などの樹木の根元周囲に生息することが分かったので、それらの特定樹木の周囲約30cm幅内を各調査地区内における個別調査地点として設定した。生息数のカウントの際は完全に廃居と思われるものは除外し、疑わしき場合はその都度堀取りにより生息の有無を確認した。

個体の大きさの表示は、蓋の直径4mm未満、8mm未満、8mm以上の3段階に区分し、それぞれ、小、中、大とした。雌雄の確認はおこなわなかったが、堀取った成体は触肢から判断してすべて雌のようであった。

各調査地区につき調査1時間当たりの生息数を便宜上、1個体、2～4個体、5～14個体、15個体以上の4段階に分けそれぞれ、稀産（△）、少産（□）、中産（○）、多産（◎）として図示した。

さらに、生息の認められた地点については、樹木の性状、土地の傾斜の有無、土質、日照等の生息環境の記録も併せて行った。

調査結果および考察

各調査地区における生息状況の調査結果を表1に、それに基づく生息分布を図1に示した。調査30地区中、調査不十分で生息の確認できなかった6地区を除く24地区うちで明らかに生息

*東京医科歯科大学医用器材研究所制御機器部門

調査地区 番号(組)	亞地区	調査地点	観察個体数			調査時間	時間当たり の観察数
			小	中	大		
1.文京区 本郷7丁目 (大学)	a	1 2 3 4	0 4 0 0	3 3 2 2	2 3 1 1	5 0 3 3	
		計	4	10	7	21	1 21
2.同上	b	1 2 3	0 0 0	0 0 2	1 1 0	1 1 2	
		計	0	2	2	4	1 4
3.千代田区 神田駿河台2丁目 (大学)		1 2 3 4 5 6 7 8 9 計	0 0 0 0 0 2 1 1 1	1 1 0 0 1 1 0 0 0	1 1 1 1 1 1 0 0 0	2 2 1 1 3 2 2 3 3	
4.文京区 千駄木3丁目 (公園)		1 2 3 4 5 6 7 8 9 計	0 0 0 0 0 1 0 1 1	0 0 0 0 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 2 2 2 2 3	
5.文京区 関口9丁目 (公園)		1 2 3 4 5 6 計	0 0 0 1 0 0	0 0 2 1 1 1	1 3 3 1 1 1	1 3 5 3 2 2	
6.新宿区 戸山2丁目 (公園)	a	1 2 3 4 5 計	0 0 0 0 0	1 1 0 0 2	0 0 2 1 3	1 1 2 1 5	
7.同上	b	1 2 3 計	0 0 0	1 1 0	0 0 1	1 1 1	
		計	0	2	1	3	1 3

表1. 東京都心北部におけるキシノウエトタテグモ *Latouchia typica* の生息状況調査結果

X^o: 調査結果不十分で生息が確認されない地区

16. 豊島区目白1丁目 (大学)
17. 文京区関口2丁目 (公園)
18. 台東区上野公園 (公園他)
19. 文京区白山5丁目 (神社)
20. 豊島区南池袋4丁目 (墓地)
21. 台東区谷中7丁目 (墓地)

(表1. のつづき)

8.新宿区 住吉町 (公園)	1 2 3	0 0 0	1 1 1	0 1 1	1 2 2		
	計	0	3	2	5	1	5
9.文京区 目白台1丁目 (公園)	1 2 3 4 5 6	1 1 0 0 0 0	2 1 1 1 1 1	0 0 1 1 1 0	3 2 2 2 2 1		
	計	2	7	3	12	1	12
10.文京区 後楽1丁目 (庭園)	1 2 3 4*1 5*1 6 7 8	0 0 0 0 0 0 0 0	1 1 1 0 0 1 2 0	2 1 1 1 0 1 0 1	3 2 2 1 1 1 2 1		
	計	0	6	7	13	1	13
11.文京区 本駒込6丁目 (庭園)	a 1 2 3 4	1 0 0 0 0	2 2 1 1 1	0 0 0 1 1	2 2 1 2 2		
	計	0	6	1	7	1	7
12.文京区 白山3丁目 (植物園)		1	0	1	0	1	
	計	0	1	0	1	3	0.3
13.文京区 根岸1丁目 (神社)		1*2	0	1	1	2	1
	計	0	1	1	2	1	2
14.新宿区 西早稲田2丁目 (神社)		1	0	0	1	1	
	計	0	0	1	1	1	1
15.文京区 千石2丁目 (神社)		1*2	0	1	0	1	
	計	0	1	0	1	1	1
	総計	62	11	60	55	125	平均 8.3 / 脇 2.0 / 脇

* 1 : 石垣の隙間 (または崖地) の横穴住居

* 2 : 境内の土台石のきわ

X : 生息が確認されない地区

22. 千代田区五番町・六番町・紀尾井町 (公園) a

23. 同上 b

24. 文京区目白台1丁目 (国施設)

25. 文京区本駒込6丁目 (庭園) b

26. 文京区湯島1丁目 (聖堂)

27. 文京区本駒込5丁目 (神社)

28. 文京区音羽1丁目 (神社)

29. 文京区大塚5丁目 (寺院)

30. 豊島区雑司が谷3丁目 (寺院)

図1. 東京都心北部におけるキシノウエトタテグモ *Latouchia typica* の生息分布
(図中の数字は調査地区番号を示す。表1. 参照のこと。)

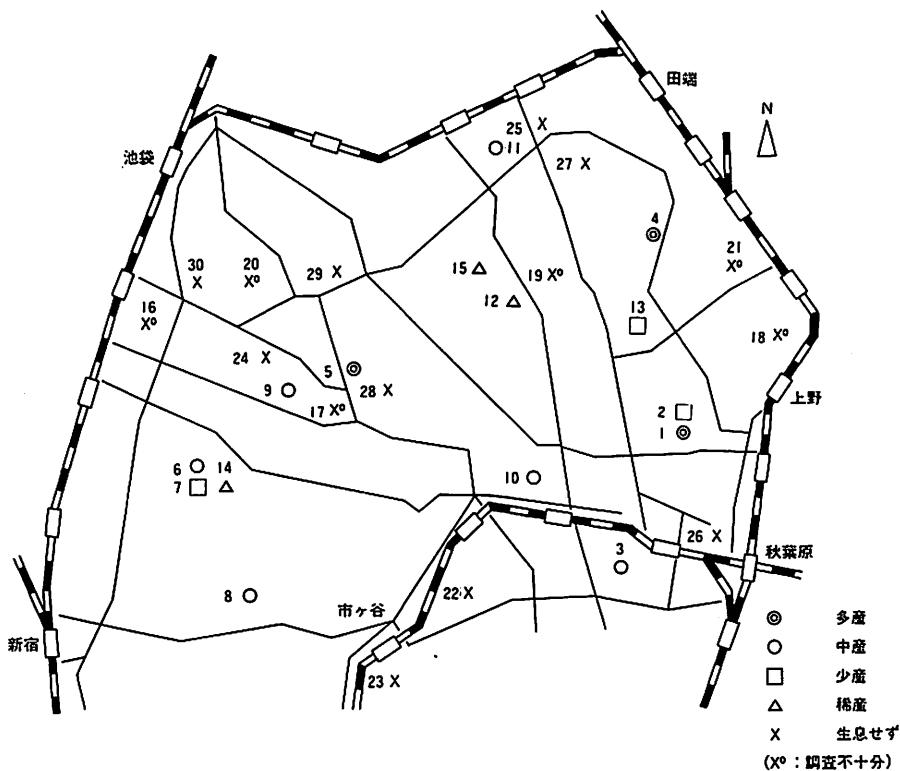


表2. 東京都心北部におけるキシノウエトタテグモ *Latouchia typica* の生息環境
(生息の確認された62地点の環境状況)

[生息地点の樹木の性状]

1. 常緑樹(38), 落葉樹(18), その他*(6)
2. 高木(35), 低木(21), その他*(6)
3. 古木(30), 若木(26), その他*(6)

[土地の傾斜有無]

4. 有(50), 無(12)

[樹木等からの方位]

5. 南(22), 東(21), 西(7), 北(12)

[日照時間]

6. 終日(6), 半日程度(16), 1/4日程度(33), 日照無(7)

[土質]

7. 粘土質(37), 砂質(25)

8. 乾燥(36), 湿潤(26)

[周辺環境]

9. 住居が落ち葉で覆われる(9), 50cm以内に多量の落ち葉あり(22), 付近に落ち葉無(31)

() 内は該当環境を示す生息地点の数

*は樹木の根元以外での生息例

を確認できた地区は15地区、62地点であった。全観察個体数は125個体で1地区当たり最高は21個体（平均8.3個体）、1地点当たりでは最高10個体で、半数の地点（62地点中33地点）では2～3個体であった（平均2.0個体）。

この結果は他の地方における結果すなわち、滋賀県近江神宮の参道（1地区）の6地点で合計446個体、1地点（広さ不明）当たり74.3個体（山道・横山、1987）や神奈川県横浜市港北区での調査 1 m^2 （1地点相当）当たり23.8個体（新海、1990）という値と比較して極めて少ないものであった。

八木沼（1986）や新海・高野（1984）によると本種は神社、寺院、旧家に多いと記されているが、今回の調査対象の都心部では社寺の境内はかなりの部分がコンクリート舗装されたり砂利石が敷かれており、かつ手入れ・清掃が行き届いているため、生息は稀にしか確認できなかつた。こういう面で公園、史跡・庭園・植物園、墓地等も程度の差こそあれ、似たような環境下にあったが、人手のあまり入らない一部の公園、大学で本種が比較的多く観察され、ひっそりと生息しているもののが多かった。このような結果からみて、公園等の画一的かつ人工的整備は環境保護という観点からはむしろ有害・無益とさえ思われた。

次に、調査初期の1990年12月中、生息確認のため行った数例の掘取りで、特定の一部地区に限り雌親と多数の幼体との同居例が2、3確認されたが、他の地区での後期（1991年 1～2月）における10数例の掘取りでは幼体との同居例は観察されず、雄も確認できなかった。さらに、幼体と思われる直徑4mmの蓋をもつものは全体の1割弱と少なくしかも全く観察されない地区も多いことから、これら雄のいない地区では成体雌が翌年の繁殖期に雄と出会う機会は少ないと考えられ、生息密度の低下の一因と思われた。なお、雌親と同居幼体の入っている住居全体をそのまま飼育瓶に移した例で、1ヶ月以内に幼体の独立住居を確認したが、その数は5～6個と少なかった。

各地区内における個別調査地点の生息環境の集計結果を表2に示した。シイ、クスなどの常緑、高木の下で、また、南、東向の傾斜地で観察されることが多いが、日照は少なめの地点が多くかった。土質は固い粘土質が多く、たまたま乾燥している地点が多かったが、これは調査日に晴天日を選んだためと考えられ、苔などがはえており本来年間を通じては湿潤地とみられる地点が多かった。なお、幼体と思われる蓋の直徑4mm未満のものは主に乾燥した砂質の地点で観察された。

上記の生息環境は概ね、旧邸宅を転用したと思われる一部の公園、大学のうちで、起伏に富み、常緑・古木が多く、手入れの行き届かない地区で保存されていた。

要 約

1. 東京都心北部を対象（人家を除く）としキシノウエトタテグモ *Latouchia typica* の個体数を調べた結果、生息の確認された15地区、62地点での平均生息密度は、8.3 個体／地区、2.0 個体／地点であり既報告の他の地方の値よりはるかに低く、野外、実験室いずれの研究もはばかられる状態であった。

2.都心北部にあっては、本種は人工的な整備のなされた神社、寺院からは姿を消し、手入れの行き届かない一部の公園、大学などで数少なくひっそりと生息していた。その生息場所は從来の記載と一部異なり、常緑・古木の根元の粘土質の傾斜地で、日照の少ない地点において観察される場合多かった。

謝　　辞

著者にとり未知な分野のクモ類研究に際し、ご懇切なご指導・ご助言を頂きました八木沼健夫博士に深く感謝致します。本調査に際し実地のご指導および本稿のご校閲をお願いした新海明氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 岸上謙吉, 1889. とたてぐも. 動物学雑誌, 1 : 154-159.
新海明, 1990. 二枚扉を持つキシノウエトタテグモの住居の記録. *Kishidaiia*, (60) : 1-4.
新海栄一・高野伸二, 1984. フィールド図鑑クモ. 204P., 東海大学出版会, 東京.
八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 305P., 保育社, 大阪.
山道秀子・横山和正, 1987. クモタケに関する 2, 3 の考察. 冬虫夏草, 7 : 22-25.

セスジアカムネグモ、コトガリアカムネグモ、トガリアカムネグモについて

田 副 幸 子*

Notes on *Ummeliata insecticeps* (BÖSENBERG et STRAND, 1906), *U.anulituberis* (OI, 1960)
and *U.erigonoides* (OI, 1960)

Schiko TAZOE*

セスジアカムネグモ *Ummeliata insecticeps* (BÖSENBERG et STRAND, 1906) は佐賀からの標本をもとに新種として記載され、その後 OI (1960) によって再記載されている。OI (1960) はさらにこの種に近縁なトガリアカムネグモ *U.erigonoides*、コトガリアカムネグモ *U.angulituberis* を新種として発表している。この三種とも、当初 *Oedothorax* 属のものと記載されたが、後に Escov (1980) によって *Hummelia* 属に、さらに BRINGNOLI (1983) によって *Ummeriata* 属に転属された。いずれも生息環境は類似し、各地、特に水田で多く観察・採集されている (新海, 1969, 1978, 1981, 1984; 八木沼, 1972; 新海・原, 1975; 菅波, 1975; 八木沼・山口・西川, 1976; 西川, 1977; 熊田, 1980; 林, 1985; 松田, 1985; 保田, 1985; 新海・熊田, 1987)。特にセスジアカムネグモは広く全国に分布することが知られ (八木沼, 1986; 千国, 1989)，その生態や害虫の天敵としての役割などが詳しく報告されている (大熊1958; 錦, 1966; 田中, 1973, 1975; 山野・木戸, 1975)。筆者も本州、九州および西表島にて水田の周辺部からこれらの種を採集し同定を試みた。しかし、OI (1960) の記載や図で示されている雌の特徴では同定が難しく、雄においても判断のつかない個体も多いことからこの三種の明確な区別点の有無を確認するため、多くの標本を用いて比較検討をした。

その結果、トガリアカムネグモは雌雄とも他の二種と主に外形的な特徴で判別できたが、セスジアカムネグモ、コトガリアカムネグモでは雌雄の生殖器でも明確なちがいを見つけることはできなかった。このことは、この二種が同種であることを含めていくつかの仮説がたてられるが、今回検討した試料に地域的な偏りもあるため、この二種の関係について最終的な結論を出すには到らなかった。今後さらにより多くの試料から研究を続けていきたいと考えている。

本論に先立ち、日頃種々のご指導をいただいている国立科学博物館の小野展嗣博士、齊藤博士、谷川明男氏ならびに貴重な標本をご恵与くださった熊田憲一氏に厚くお礼を申し上げます。

*神奈川県立野庭高等学校 (〒233 横浜市港南区野庭町1660)

材料と方法

材料とした標本は次の雄192個体、雌235個体である。

- 10♂, 5♀, 28-IX-1978, 北海道宗谷支庁豊富温泉, 熊田憲一採集
5♂, 6♀, 24-III-1986, 11♂, 1♀, 3-V-1986, 5♂, 14♀, 4-V-1986, 2♂, 6♀, 5-V-
1986, 2♂, 7♀, 29-VI-1986, 2♂, 26-X-1986, 17♂, 8♀, 23-XI-1986, 7♂, 9♀, 24-XI-
1986, 3♂, 10♀, 25-I-1987, 宮城県登米郡伊豆沼, 谷川明男・田副幸子採集
*1♂, 3♀ (うち2♀は外雌器検討不可能), XI-1958, 山形県東置賜郡赤湯町
4♂, 14♀, 24-VI-1990, 福島県白河市白川関所跡, 谷川明男採集
1♂, 1♀, 10-III-1977, 1♂, 7♀, 2-III-1986, 茨城県つくば市, 谷川明男採集
1♂, 26-IV-1986, 栃木県日光市, 田副幸子採集
10♂, 5♀, 26-XI-1974, 埼玉県入間郡巾着田, 熊田憲一採集
*1♂, 1♀, 17-VI-1955, 東京都府中市
4♂, 11♀, 11-XI-1989, 神奈川県川崎市黒川, 熊田憲一採集
1♂, 1♀, 31-V-1986, 2♂, 6♀, 7-II-1987, 2♂, 2♀, 31-I-1987, 神奈川県横浜市野庭町,
谷川明男・田副幸子採集
9♂, 21-XII-1985, 9♂, 8♀, 11-I-1986, 1♂, 21-XII-1985, 1♂, 2♀, 30-XI-1985, 神奈川
県横浜市舞岡町, 谷川明男・田副幸子採集
6♂, 8♀, 23-VII-1989, 神奈川県横浜市四季の森, 熊田憲一採集
1♂, 6-VI-1973, 神奈川県海老名市, 熊田憲一採集
1♂, 26-VI-1971, 神奈川県厚木市上谷戸, 熊田憲一採集
1♂, 19-VII-1973, 山梨県日野春, 熊田憲一採集
8♂, 24♀, 2-IV-1991, 静岡県清水市, 田副幸子採集
9♂, 8♀, 9-VIII-1990, 長野県南安曇郡豊科町, 谷川明男採集
1♂, 6♀, 24-VII-1988, 長野県小県郡菅平, 田副幸子採集
1♂, 3♀, 1-XII-1957, 奈良県“生駒山”
1♂, 1-VI-1958, 京都府“芦生”
2♂, 7♀, 8-XII-1951, 大阪府“城北公園”
* 2♂, 2♀, 13-XI-1955, 大阪府城北
2♂, 3♀, 15-IX-1957, 大阪府“守口”
3♂, 6♀, 31-XI-1957, 大阪府“矢田大和川堤”
*1♂, 13-VI-1957, 大阪府淺香
*2♂, 3♀, 16-VI-1957, 大阪府香里
*2♂, 1♀, 13-VII-1954, 大阪府高牛
1♂, 24-IX-1955, 大阪府“淀川堤”
25♂, 23♀, 26-XII-1986, 熊本県八代郡鏡町, 田副幸子採集
6♂, 24♀, 22-VIII-1989, 鹿児島県日置郡永吉, 熊田憲一採集

1♂, 2♀, 29-III-1986, 1♂, 2♀, 27-III-1986, 沖縄県八重山郡西表島, 谷川明男採集

3♂, 3♀, 21-XI-1957, “杉本町”

*を記した標本はOI (1960) の所検標本である。

色彩, 斑紋, 体形などは互いによく似ていて区別点とならないため(図1), 次のような標徴で雌雄各々検討した。

雄: 一般に同定に用いられる触肢の構造はいずれも酷似しているため(図2), OI (1960) の記載および図から次の3点を判別の標徴として選んだ。まずIの標徴にて標本を分け, Iにて同種と判断した個体間でIIおよびIIIを比較検討した。

- I. 肢膝節前端腹面突起の形状の有無およびその形状
- II. 頭瘤の形状および頭瘤先端の鋸歯の形状
- III. 触肢脛節背面前端の形状

雌: 雄と同時に採集した雌を同じグループのものとみなし, それぞれのグループの雌を比較検討した。そのため, 雌のみの採集の場合は材料から除外した。

OI (1960) の記載および図からは明確な区別点が見いだせなかつたので, 一般的に重要視されているI. 外雌器の形態, およびII. ゲニタリアの構造を中心に検討した。

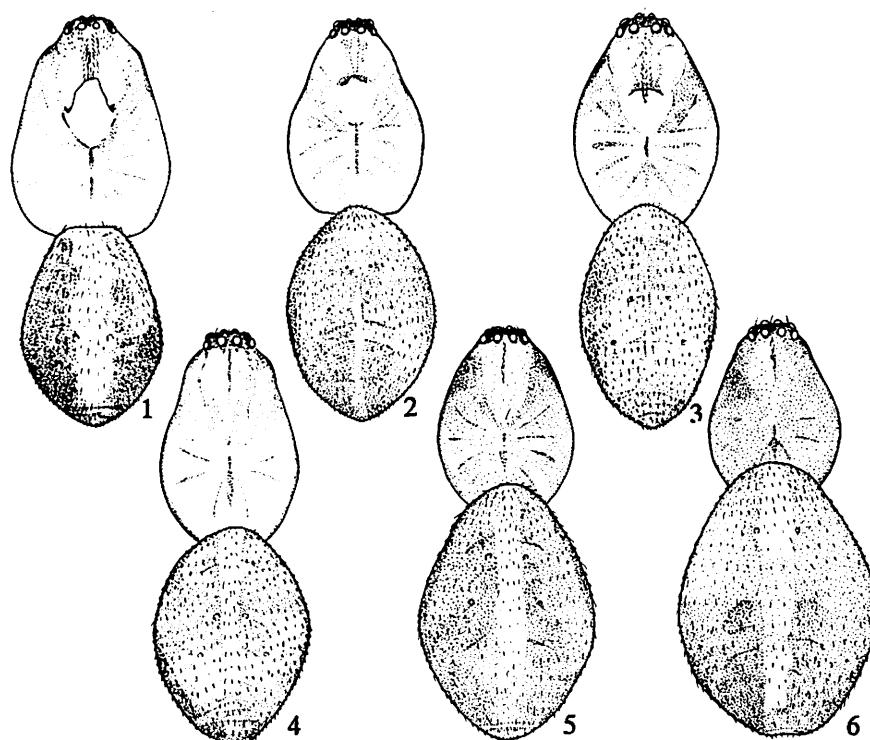


図1. 背面. 1~3. 雄. 4~6. 雌.
1, 4. Aグループ. 2, 5. Bグループ. 3, 6. Eグループ.

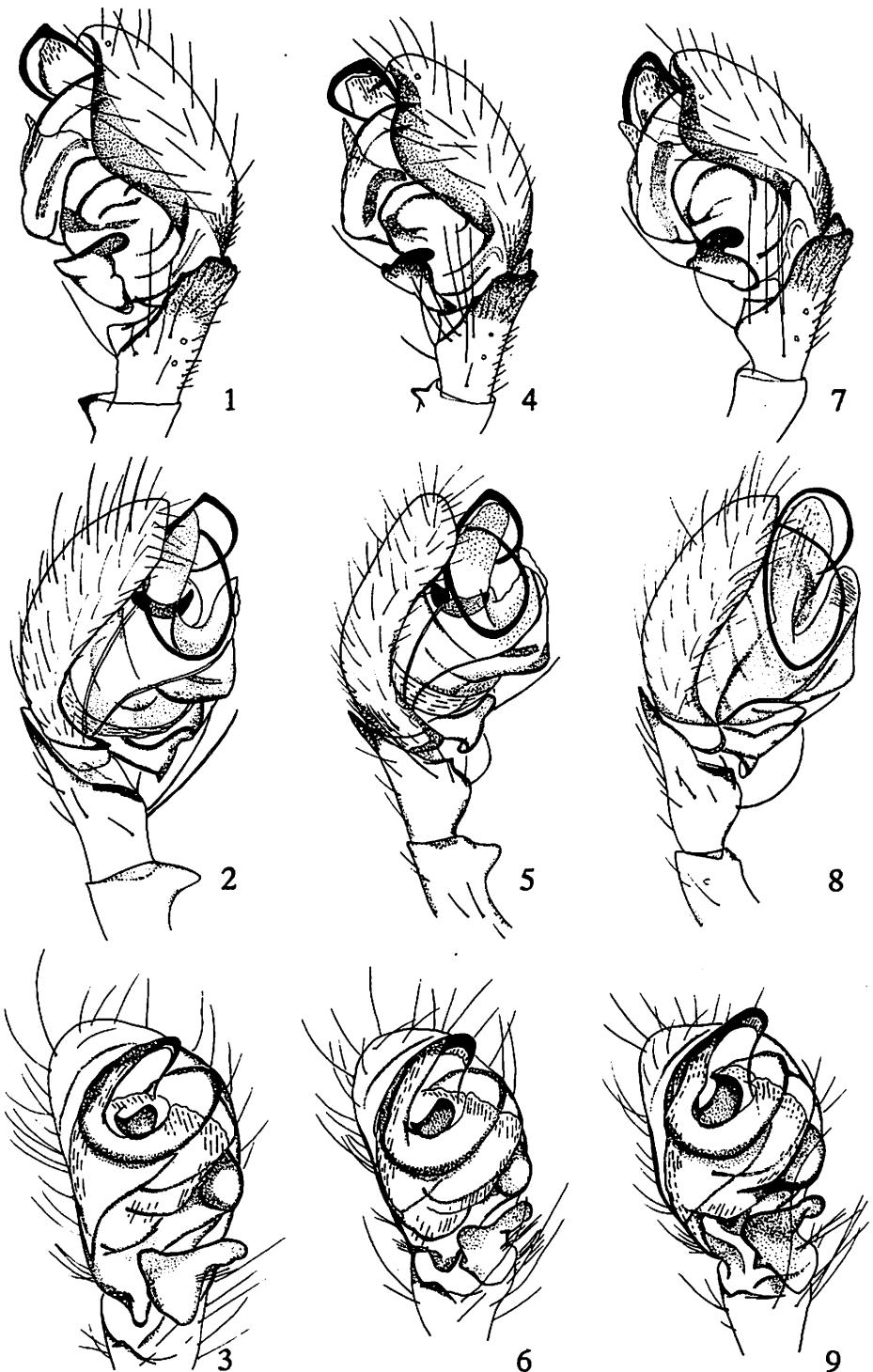


図2. 1, 4, 7. 雄左触肢外側面. 2, 5, 8. 雄左触肢内側面.

3, 6, 9. 雄左触肢腹面.

1~3. Aグループ. 4~6. Bグループ. 7~9. Eグループ.

結 果

雄： I. 触肢膝節前端腹面突起の形状の有無およびその形状

突起の有無および形状で次の5グループに分けた。

- A かなり大きい突起で突起先端部が後方にわずかに曲がる（図3-1）。OI（1960）の記載するトガリアカムネグモの突起と一致する。
- B Aよりは小形の突起であるが背面、側面のどの方向からも確認できる（図3-2）。OI（1960）のコトガリアカムネグモの突起と一致する。
- C 側面からBより小形の突起が確認できる（図3-3）が背面からはほとんど見えない。
- D 膝節前端が開き気味であるが、突起としては認識しがたい（図3-4）。
- E 膝節前端が脛節との連結部にかぶさる状態でCのような突起およびDのような前端の開きは見られない（図3-5）。OI（1960）のセスジアカムネグモの状態と一致する。

各グループの採集地は次のとおりである。

- A 北海道豊富温泉；山形県赤湯町
- B 宮城県伊豆沼；福島県白川関所跡；埼玉県巾着田；神奈川県黒川
神奈川県野庭町；神奈川県舞岡町
- C 埼玉県巾着田；茨城県つくば市；栃木県日光市；神奈川県四季の森
神奈川県海老名市；神奈川県黒川；神奈川県野庭町；長野県菅平
- D 埼玉県巾着田；神奈川県上谷戸；山梨県日野春；熊本県鏡町；鹿児島県永吉
- E 東京都府中市；埼玉県巾着田；長野県豊科町；奈良県生駒山；京都府芦生
大阪府城北公園；大阪府城北；大阪府守口；大阪府矢田大和川堤；大阪府浅香
大阪府香里；大阪府高牛；大阪府淀川堤；熊本県鏡町；鹿児島県永吉
沖縄県西表島；杉本町

II. 頭瘤の形状および頭瘤先端の鋸歯の形状

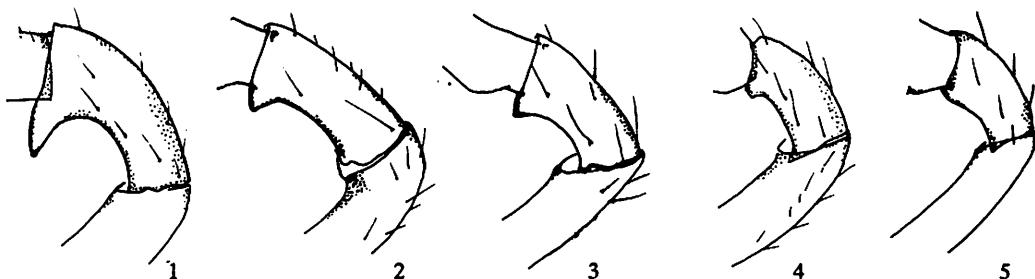


図3. 雄左触肢膝節前端腹面突起側面。

1. Aグループ. 2. Bグループ. 3. Cグループ. 4. Dグループ. 5. Eグループ.

Iで区別した5つのグループについて各々検討をした。

- A 他のグループに比べ、どの個体もその頭瘤は大きく、また前方にかぶさっている（図4-1）。OI (1960) はトガリアカムネグモでは前端に3個の鋸歯があると記載しているが、中にはほとんど角もなくなめらかな個体もいる（図4-2, 3）
- B Aに比べ小形でその前方のふくらみよりやや高いものから低いものまでその変異の幅は広い（図4-4, 5）。頭瘤の前端にはOI (1960) が記すコトガリアカムネグモの1個の鋸歯をもつ個体もあるが、A同様鋸歯が見られずその縁が滑らかな個体も見られた（図4-6, 7）。ほとんどの個体の溝が斜めに入り頭瘤がその溝に平行に沿うかたちで位置しているが垂直に溝が入る個体もいる。溝の深さもさまざまである。
- C Bによく似ており、変異もB同様多い。

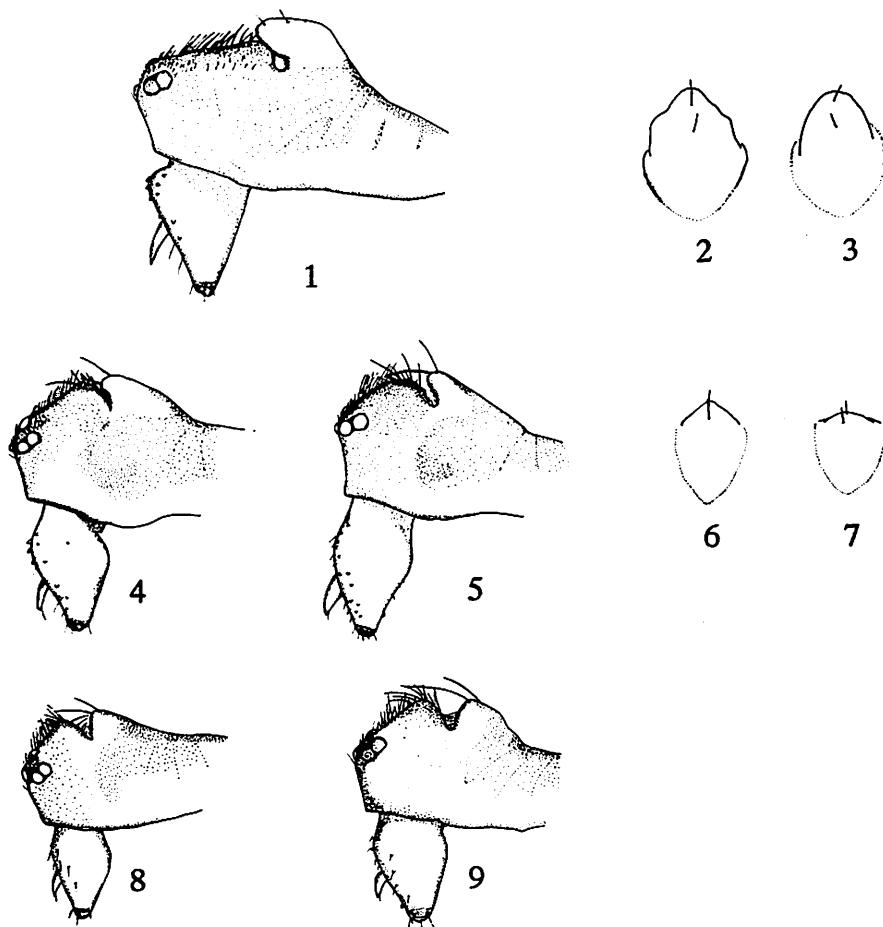


図4. 1, 4, 5, 8, 9. 雄頭瘤側面. 2, 3, 6, 7. 雄頭瘤背面
1～3. Aグループ. 4～7. B・Cグループ. 8. Dグループ. 9. Eグループ.

D B, C同様小形の頭瘤で溝が斜めに入る個体もいるが、溝が垂直に入る個体も多く、この場合頭瘤とその前方のふくらみの間隔がかなり大きく、頭瘤自体やや小さめである（図4-8）。

E ほとんどの個体の溝が垂直に入り頭瘤の高さは前方のふくらみに対しほぼ同程度である（図4-9）。頭瘤の前端はゆるく弧を描いているが、時には直線に近い個体もいる。

III. 触肢脛節背面前端の形状

A 他のグループに比べ全体的に幅広くそのいくつかの鋸歯も尖ってはいない。他と明らかに区別できる（図5-1）。

B 縁にはいくつかの鋸歯があるものの鋸歯自体尖っていないためゆるやかな波状に見える（図5-2）。

C Bによく似ているが、中央の最も大きな鋸歯がやや尖り気味で隣接する鋸歯との長さにかなり差がある個体もある。

D B, Cに比べると中央の鋸歯が鋭く尖っているため、縁が歯状に見える個体が多い（図5-3）。

E Dとよく似るが、個体によっては中央の鋸歯と隣の鋸歯の間の溝がほとんどなく一塊となるものもある（図5-4）。

雌：I. 外雌器形態

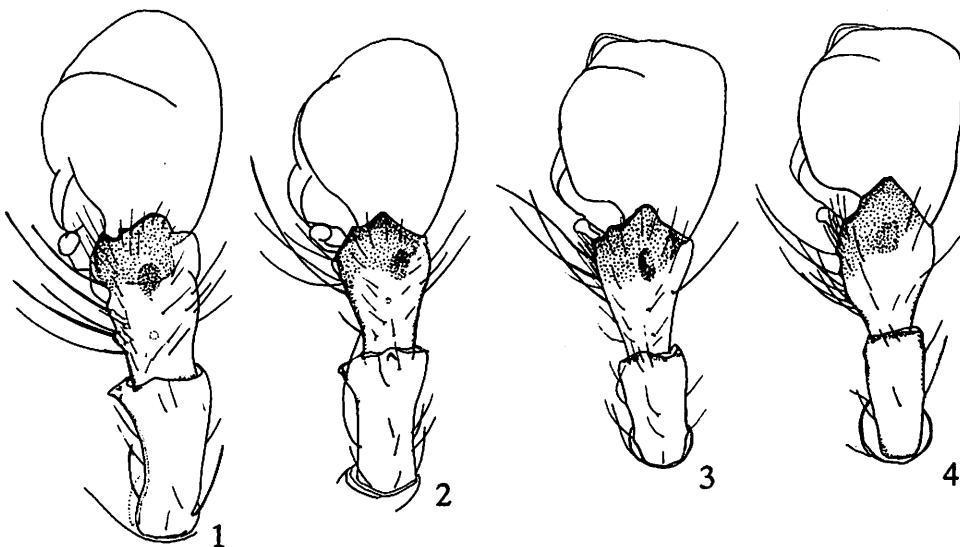


図5. 雄左触肢脛節背面前端。

1. Aグループ 2. B・Cグループ 3. Dグループ 4. Eグループ

A 他のグループに比較して全体的に大きく、開口部もやや大きめである。さらにOI (1960) も記載しているが、中央下方に三角の壁がいずれもある。これは他のグループにはみられない特徴である(図6-1, 2)。

B～Eいずれのグループも類似性が高く、大井が記載する開口部の大きさの違いはグループ間では明らかな差としては確認できず、また他の形態上のちがいも認められなかった(図6-4, 5, 7, 8)。

II. ゲニタリア

どのグループもその構造は極めて似ており、明確に判別できるだけのちがいはみられなかった(図6-3, 6, 9)。

考 察

OI (1960) の記載するトガリアカムネグモは今回の検討でもその標徴が雌雄ともに明白で、雄では触肢膝節突起、触肢脛節前端の形状および頭胸部頭瘤の形状、雌では外雌器で他の種との判別は容易である。それに対し、コトガリアカムネグモ、セスジアカムネグモに関してはOI (1960) が示す標徴で判別が容易な個体がいる一方で、各々の標徴に変異の幅が大きく、雄Iの標徴で別のグループとした個体同士で、他の標徴ではよく似ている場合も数多くあった。この結果をもとに各グループごとの採集地域の勾配(Bは主に関東以北、Cは関東一円および中部、Dは関東以西、Eは主に関西および九州方面)も含めて考え、次のような仮説をたてた。

1. BからEまでを同種として、地域によってわずかずつ変異がある。

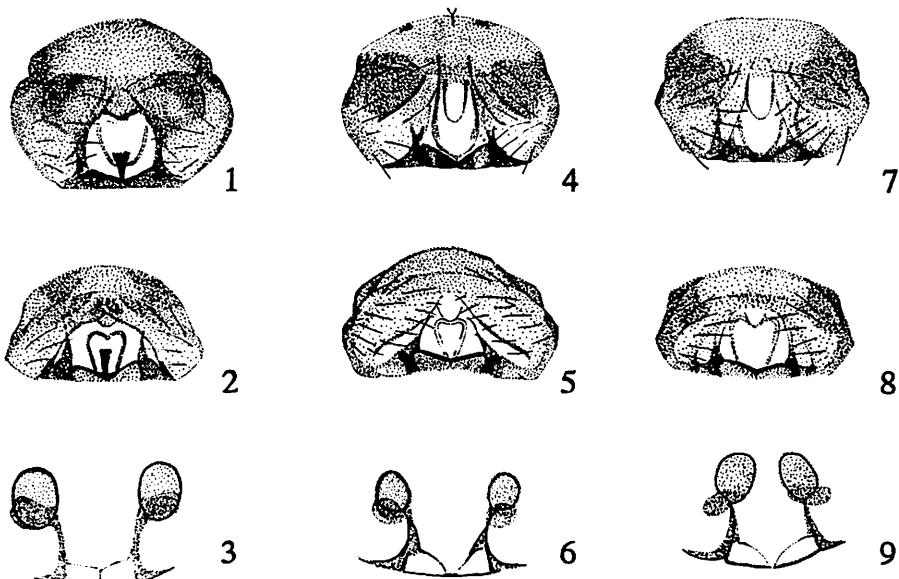


図6. 1, 4, 7. 外雌器正面。 2, 5, 8. 外雌器やや後方より。

3, 6, 9. ゲニタリア。

1～3. Aグループ。 4～6. Bグループ。 7～9. Eグループ

2. 雄の標徴の中でグループ間であまり重なりの多くなかったI, IIIの標徴で判断して、B Cをコトガリアカムネグモ、D Eをセスジアカムネグモとする。
3. 雄Iのみの標徴でBをコトガリアカムネグモ、Eをセスジアカムネグモとし、CおよびDを新たな種と考える。

このような仮説に対して、次のように考える。

1. に関して雌の外雌器では標徴として用いるだけのちがいがなかったこともあるので納得のいくものとしたいが、雄のBとEのグループ間の比較では異種と考えても良いだけの大きなちがいが各標徴の中にあり、はたして地域的な勾配の中で生まれてきた変異として考えて良いものか難しい。特に今回の検討標本に地域的な偏りもあることからこのような判断はより多くの標本を対象に検討してから慎重にしたほうが良いものと考える。

2. は現在の状況では妥当なものとも考えられるが雄の標徴ですら判断に迷う個体もあり、さらに雌では今回外雌器に標徴となり得るだけのちがいもみつけられず確実な同定がむずかしい。より明確な標徴が必要である。

3. は1. の仮説のB E間の問題の弱点を解決するとも考えられるが、Cを完全にBとは異なる種とするには突起がやや小さめであること以外、突起と判断できるだけの大きさもあり、突起の形にも差がなかったので即断はできない。同様にDとEは膝節前端部分と脛節との角度によっても開きがあるか否かの判断が難しく異種とするには今回の標徴のみでは混乱をまねく恐れがある。

以上、コトガリアカムネグモとセスジアカムネグモは多数の標本をもとに検討を試みたものの採集地に地域的な偏りがあり、また、より明確な標徴を見いだせなかつたため、さまざまな疑問が生じたが、現在の標徴のみでは雌はもちろのこと雄でも同定がはなはだ難しいことだけは明らかになった。今後さらに多くの地域での観察採集、検討を続けこの二種の関係を明らかにしていきたいと考えている。

引用文献

- BRIGNOLI,P., 1983. A Catalogue of the Araneae described between 1940 and 1981. 755pp. Manchester
千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 偕成社.
- Escov.K.Y., 1980. Taxonomic notes on spiders of the genus *Hummelia* (Aranei, Linyphiidae) with a description of a new species. *Zool. Zh.* 59:1743-1746.
- 林 俊夫, 1985. 群馬県の真正クモ類. 群馬県動物誌 : 513-541.
- 熊田憲一, 1980. 三浦半島の真正蜘蛛類. *Kishidaiia*, 45 : 9-27.
- 松田まゆみ, 1985. 北海道中央高地(大雪山国立公園)の真正蜘蛛類. *Bull. Higashi. taisetu Mus. Nat. Hist.*, 7:1-33
- 西川喜朗, 1977. 箕面市のクモ. 箕面川ダム自然環境の保全と回復に関する調査研究 : 350-

- 錦 三郎, 1966. クモの空中移動について. *Acta arachnol.*, 10 : 24-34.
- 大熊千代子, 1958. セスジアカムネグモの生態. *Acta arachnol.*, 15:21-23.
- Oi, R., 1960. *Linyphiid spiders of Japan. J. Inst. Polytech. Osaka City Univ., Ser. D*, 11:136-244.
- 新海栄一, 1969. 東京都産真正蜘蛛類. 65pp.10pls東亞蜘蛛学会.
- 1978. V. 八王子市のクモ. 日本私学教育研究所 調査資料. 56 : 79-109, pls. 1-17.
- 1981. V. 八王子市のクモ. 日本私学教育研究所 調査資料. 81 : 45-57.
- 1984. 多摩川水系流域の真正クモ類. とうきゅう環境浄化財団助成集報. 56 : 30-89.
- 新海栄一・熊田憲一, 1987. クモ類. 県指定天然記念物地域動物調査報告書. pp.81-331.
- 新海栄一・原 勝司, 1975. 秩父地方の真正クモ類. *Atypus*, (65) : 7-18.
- 菅波洋平, 1975. 茨城県の真正蜘蛛類. 茨城の生物. (1) : 131-143.
- 田中穂積, 1973. 近畿における水田に生息するクモ類の生態学研究 (I). *Acta arachnol.*, 25: 10-15.
- 1975. 近畿における水田に生息するクモ類の生態学研究 (II). *Acta arachnol.*, 16: 51-57.
- 八木沼健夫, 1972. 北海道日高山脈の蜘蛛. 国立博物館専報, 5 : 17-32.
- 1986. 原色日本クモ類図鑑. 保育社.
- 八木沼健夫・山口鉄男・西川喜朗, 1976. 対馬の蜘蛛. 対馬の生物, 長崎県生物学会 : 823-837
- 山野忠清・木戸敬二, 1975. 水田におけるクモ類とその季節的変動. *Atypus*. 64: 27-34.
- 保田信紀, 1985. 上川町(大雪山・石狩川源流域)の真正蜘蛛類ノートVI. 上川町の自然生物目録 : 93-104.

クモの幼体の記載 1

イナズマハエトリ, オスクロハエトリとヒメグモの出のう幼体

池田博明*

Some Spiders' Nymphs (1)

Hiroyoshi IKEDA*

ほぼクモ相が分かっている地域で、幼体にめだった特徴があれば、幼体でも同定できる種がある。では、具体的にそれはなんなのか、その幼体にはどういう特徴があるのかと問われると、うまく答えられない。なにごとも経験を積めば次第に分かってくるものだろう。しかし、経験を普遍化し、勘といわれるものを顕在化して、同好者共通のものとするのが、大切な仕事だと思う。

母グモと卵のうを採取すれば、やがて種名の確かな出のう幼体（通常は2齢幼体と見なされる）を得ることが出来る。そこで、私はそのような機会を出来るだけ生かして、幼体の記載を行いたいと考えている。幼体の原色図の試み（小松, 1936; ハナグモ）や、飼育して脱皮する度に幼体を描図・記載した例もある（小野, 1975; クサグモ雄の成体から - 5齢: 趙 et al. 1979; ヤホシヒメグモの1齢～4齢）。幼体図鑑の試みについては既に書いた（池田, 1989b）。谷川明男氏は接写による記録を薦めて下さった。できる範囲でそれも努力するつもりである。

出のう幼体はまだ卵黄をたくさん持っていて、種毎の色彩の変化に乏しいので、欲を言えばもう1回脱皮したところが集められればいいのだが。

素性の明らかな幼体をお持ちの方は参考させていただければ有り難い。

今回はイナズマハエトリ、オスクロハエトリ、ヒメグモの出のう幼体（共に多分2齢）を記載する。イナズマハエトリとオスクロハエトリの試料を提供して下さったのは前川隆敏氏である。また、ハエトリグモに関しては、今後ともBOHDANOWICZ and PROSZYNSKI(1987)の論文「日本のハエトリグモ」を分類的解説として適宜翻訳して紹介する。

イナズマハエトリ幼体 *Icius vulpes* nymph at emergence (図1 参照)

所検標本：1991年9月17日採（出のう後約1ヶ月経過した幼体である）。母グモは神奈川県大和市泉の森産（7月7日採集、7月24日産卵、8月4日ふ化、8月中旬出のう。前川氏による）。

測定：体長1.49mm, 背甲幅0.56mm, 背甲長0.76mm, 腹部幅0.54mm, 腹部長0.70mm.

*神奈川県立青少年センター

*Kanagawa Prefectural Youth Center

形態：背甲・腹部とも平たい。

色彩：一見、背甲部は黒く、腹部は白く見える（白と言ってもやや淡い黄色味がかった白色である。これは他種にも言える）。背甲は黒褐色で、腹部背面は白色で所々やや黒い縞があるが、腹部腹面は一面白色であった。歩脚は白色だが、各脚の付節末端と、次に記す部分は黒い（第3脚膝節末端、第4脚膝節末端・脛節末端）。

成体との比較：腹部背面のイナズマ模様は後端ではそれらしく見えないこともないが、明瞭ではない。成体では白毛がイナズマ紋を作るが、幼体ではそのような白毛はない。

生活史：成熟期は4～5月と9～10月。袋状住居内で越冬する（千国、1989）とされるが、所検標本の母グモは7月～8月の成体だし、（9月現在も生存），東京蜘蛛談話会の記録では7月の夏期にも成体が採集されている。広く分布することも考慮すると、千国（1989）の成熟期は地域的なものだろう。

分類的解説（BOHDANOWICZ and PROSZYNSKI, 1987を訳注を付して抄訳した。訳注は〔 〕内に記入）：BOESENBERG et STRANDが「日本の蜘蛛」（1906）で、佐賀県【金刀比羅神社】産の1雄で記載したクロカネハエトリ *Euophrys breviaculeis* と山形県羽黒町産の2雄で記載したイナズマハエトリ *Euophrys undulatovittata* は共に *Attus vulpes* GRUBE, 1861 と同種と見なされる。イルクーツクやウスリー地方のものと差はない。〔「日本の蜘蛛」の *Breda lambda-signata* がイナズマハエトリとされ、*E. undulatovittata* はクラオキネコハエトリとされていたが、八木沼（1961）により、前者は後者のシノニムとされた。しかし、松本（1977）により *Euophrys* 属のタイプのカタオカハエトリとは、背甲の高さや第1脚の装飾毛などがかなり異なることが指摘されていた〕

Icius 属はSIMONが1876年にたてた属だが、研究者により異なった扱いをされてきて、紛糾してきた。この属の多くの種を検討したANDREEVA et al. (1984)は*Icius* 属と*Pseudicius* 属（1885年にSIMONがたてた）を分けるはっきりした差がないとした。属徴は雄では触肢脛節突起が二枝であること（稀に痕跡的に一枝）、雌では単純な例では外雌器に短い受精管を備えた単純なバッグ型貯精のうを持つことだが、旧世界の既知種・未記載種の間には大きな変異があった。しかし、ひとつの属にまとめようとする傾向にある。割に低く、平らで長い背甲部、特徴的な腹部斑紋など、使えそうな標徴がある。また、この属の数種だけではあるが、側方の眼の下に並んだ剛毛（または刺毛）を備えた1列の硬化したwarts（何を指すか不明）がある。本属の範囲を確定するのは将来の課題である。

分布：ソ連（BOHDANOWICZ and PROSZYNSKI, 1987），北海道を除く日本（千国、1989）の他、韓国・中国に広く分布する（KIM, 1991；朱、1983）。ウスリーやイルクーツクに分布することから、今後、北海道でも記録されるのではないのか。

オスクロハエトリ幼体 *Marpissa magister* nymph as emergence (図2参照)

所検標本：1991年10月1日採。母グモは神奈川県海老名市産（9月30日採集、卵のうとそれか

ら出のうした幼体68頭を守っていた。前川氏による)。

測定：体長2.11mm，背甲幅0.70mm，背甲長1.14mm，腹部幅0.60mm，腹部長1.08mm。

形態：背甲・腹部とも平たい。

色彩：背甲部と第1脚脛節から先は淡アメ色，腹部と他の歩脚はイナズマハエトリ幼体よりもやや黄色味のある白色で，腹部背面には中央に黒い線があるほか，左右にも不連続な黒線があり，腹側にも黒点が散在する。背甲背面の黒い部分は図の通りである。腹面は胸板も腹部も白い。

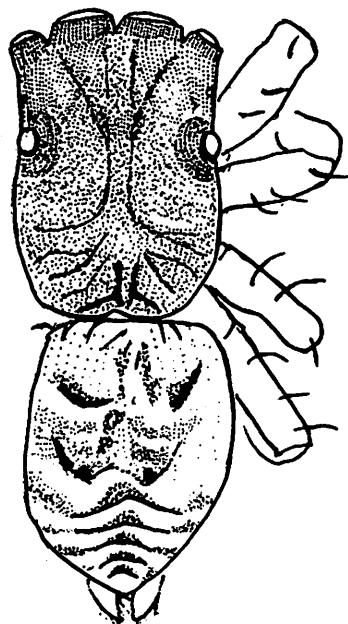
成体との比較：全体の体形は成体に似るが（腹部長の割合が小さいものの），斑紋はかなり異なる。雄の幼体については千国（1989）に写真と解説がある。

生活史：成熟期は6～8月（千国，1989）とされるが，神奈川県海老名市ではもっと遅く，9月下旬に雄成体が雌亜成体と同居し，雌の最終脱皮を待って交尾する（前川，私信）。

分類的解説：ベルリンの動物学博物館にある本種のタイプ標本 [*Icius magister* KARSCH, 1879] は未熟な1雌で正しく同定できない (PROSZYNSKI, 1973b)。BOESENBERG et STRAND (1906)が同定し記載した佐賀県産4頭の雌がカルシュの原記載を最初に当てはめた資料とみなしうる。残念ながら，その標本には別種が混在しており，少なくとも2種，オスクロハエトリとヤハズハエトリがある。

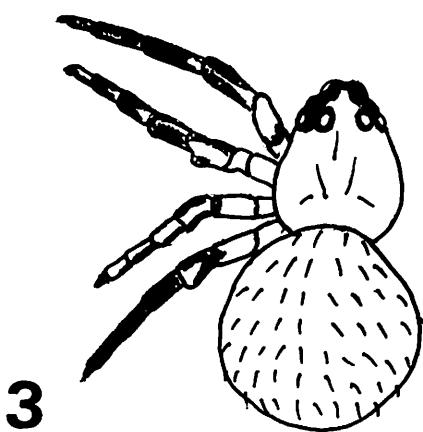
Marpissa 属は，C.L.KOCH が1846年にたてた属で，模式種は *Marpissa muscosa* (CLERCK, 1758) である。雄の触肢の胚葉の側面が平たいことや，雌の外雌器の複雑なコイルが特徴とされた。この属は二群に分かれ，属が分けられることもある。真の *Marpissa* (オオハエトリ *M.dybowskii*, ヨダンハエトリ *M.pulla* その他) は幅のある平たい腹部や周囲を栓子に囲まれたバルブを持ち，胚葉はかなり幅広く通常わん曲している。第2群は (ヤハズハエトリ *M.elongata*，オスクロハエトリ *M.magister*，シナノヤハズハエトリ *M.pulchra* その他) はほっそりした腹部や短い栓子，中央の隆起によって分離された2個の窓みから成る外雌器が特徴である。受精管は密な結び目を作る。後者の群は *Hyctia* や *Mithion*, *Icidella* などと名付けられた。これらの属名のうち，最初の二つの使用には長所がある。*Marpissa* に対して *Hyctia nyvovi* の関係は今後も研究を要する。南欧で知られた *Mithion canestrinii* は明らかに *M. magister* と同属であり，近縁種である。両群は大変に近く，北美や旧北区と連続した鎖を構成する。これらをひとつの属と呼ぶことは相互の関連を強調するものだ。同定の標徴の記述では悩みを生ずるもの。SIMON が1884年に建てた *Mithion* の模式種は *M.semiargenteus* だが，実際のところ1885年にSIMONが建てた *Thyene* 属に所属する。他には *Mithion* に属する種はないのだ。*Mithion* という属名は1年早いものの *Thyene* 属（3大陸にわたりたくさんの中を含む）のシノニムとすべきだろう。別の選択，*Thyene* 属のすべての学名の変更は大変な命名上の混乱を引き起こすだろう（以上，BOHDANOWICZ and PROSZYNSKI, 1987より）。

[*Mithion* (→*Marpissa*) *canestrinii* NINNI の幼体腹部背面図や雌雄の生殖器の図はオスクロハエトリのそれと大変よく似ている。また二人は1966年6月25日に菅波洋平氏が茨木で採集した1雌で，*Marpissa ibarakiensis* を記載しているが，これはシナノヤハズハエトリに酷似しており，最も重要な差異は，外雌器の内部構造にあるという。しかし，図からはオスクロハエトリとも似ており，変異の範囲内とも見なせる。標本の状態がよくないそうで，新鮮な標本でさらに検討を



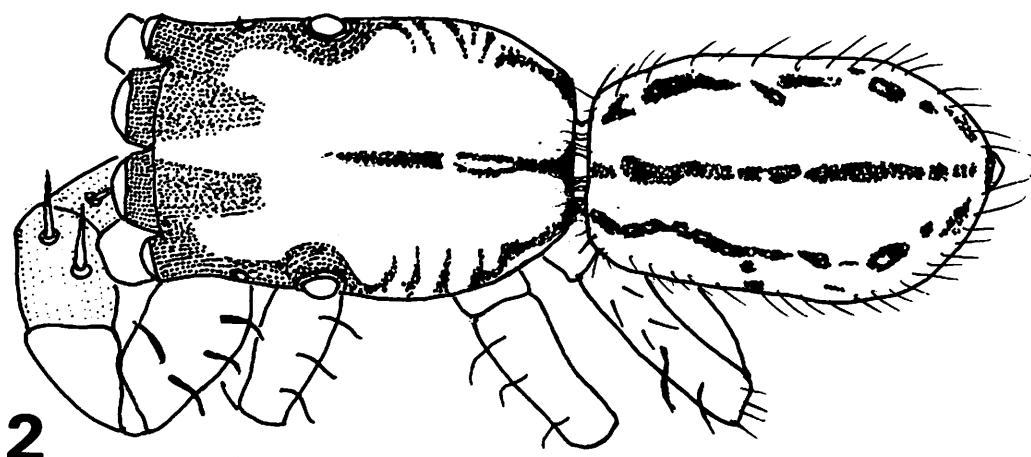
1

図1. イナズマハエトリの出のう幼体



3

図3. ヒメグモの出のう幼体



2

図2. オスクロハエトリの出のう幼体

(スケールは 0.2mm)

要するという。日本の*Marpissa* 属数種の関係が整理された経緯は既に書いた（池田，1989a）]
分布：本州（中・南・西部），四国，九州（千国，1989）の他，韓国・中国に広く分布する
(KIM, 1991; 朱, 1983)。

ヒメグモ幼体 *Achaearanea japonica* nymph as emergence (図3参照)

所検標本：1991年9月18日採；母グモは小田原城内高校産（1991年7月29日採集，9月3日出のう）。

測定：体長0.86mm，背甲幅0.35mm，背甲長0.40mm，腹部幅0.49mm，腹部長0.48mm。

色彩：背甲・胸板・腹部背面腹面などすべて黄色，歩脚は膝節より先が黒色だが，第3脚は黒色部分が少なく，特にその腹面は黒くなっていない。

成体との比較：成体も後期幼体も脚先が黒い。この特徴は他の類似種コンピラヒメグモやキヒメグモとの区別点となる。成体の場合は第1・2脚は脛節基部から先，第3・4脚は脛節末端から先が黒い。幼体の腹部背面には成体のような黒点紋様はない。頭部や背甲の形態や眼の配置は成体のものに類似している。

生活史：神奈川県小田原市では，産卵は主に8月中下旬だが，早い個体もある（池田，1990）。出のうは早いものでは8月中旬，主に9月になる。Ito (1985)によると，出のう幼体は母親がかんだ餌をもらい（11月中旬から約3週間。ただし奈良市），脱皮せずに分散，越冬する。

分類的解説：「日本の蜘蛛」（1906）では，佐賀県佐賀郡富士町湯ノ原（ユノハルと読む）産 (Yunohama-Berge と記されている) の雌雄（1881年5月29日デーニツが採集）で，*Theridium japonicum* として記載された。小松栄（1936）は本種をヒメグモと記している。校閲者の岸田久吉がそう称していたのだろう。齊藤三郎（1941）はコンピラヒメグモを「ミツクロボシヒメグモ」とし，本種を「ミツシロボシヒメグモ」と称したが，現在は両種とも八木沼（1953）が選んだ和名が使われている。

Theridion から*Achaearanea* が出来た経緯は八木沼（1955）に記されている。吉田哉（1984）が *Achaearanea* に転属した。

分布：日本全土のほか台湾・韓国にも分布する（朱，1983；KIM, 1991）。中国にも分布するほか，東南アジアの*A.mundula* に近似し，地理的変異の可能性もある（吉田，1984）という。普通種だが，八木沼（1952）以前の各地の目録には，ほとんど本種に該当する種名が挙げられていない。

引用文献

BOHDANOWICZ,A, and J.PROSZYNSKI, 1987. Systematic studies on East Palearctic Salticidae (Araneae), IV.Salticidae

of Japan. *Annales Zoologici*, 41(2):43-151.

千国安之輔, 1989. 写真日本クモ類大図鑑. 309p. 偕成社. 東京.

池田博明, 1989a. 似てない夫婦. (IN 梅谷誠二・加藤輝代子編「クモのはなし I」, p.9-17. 技報堂出版).

池田博明, 1989a. 似てない親子. (IN 梅谷誠二・加藤輝代子編「クモのはなし II」, p.18-26. 技報堂出版).

池田博明, 1990. ヒメグモの生活史覚え書き. *Heptathela*, 4 : 11-16.

Ito,C.,1985.Brood-care behaviour in *Theridion japonicum* observed at a laboratory. *Acta arachnol.*,34:23-30.

Kim,J.P.,1991.A check list of Korean spiders.*Korean Arachnol.*,6:275-291.

小松栄, 1936. 原色日本蜘蛛類図説. 蘭山会.

松本誠治, 1977. 湯ノ原および金刀比羅神社（佐賀県）のハエトリグモについて. *Atypus*, (69) : 3-15.

小野辰嗣, 1975. クモの生活史研究の問題点及び飼育記録の一方法. *Kishidaia*, (39) : 49-54.

齊藤三郎, 1941. 日本動物分類. No.37.220p. 三省堂.

朱伝典, 1983. 中國蜘蛛名錄. 白求恩医科大学学報, (9) 増刊 : 1-130.

趙敬・文・陳, 1979. 八斑球腹蛛生物学特性的観察. 昆虫天敵, 25-34.

八木沼健夫, 1952. 北山峠の蜘蛛. *Atypus*, (1) : 13-20.

八木沼健夫, 1953. 日本産として記録されたクモ. *Atypus*, (3) : 9-20.

八木沼健夫, 1955. 才オヒメグモの学名. *Atypus*, (8) : 29.

八木沼健夫, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 64図+305p. 保育社. 大阪.

吉田哉, 1984. 日本産 *Achaearanea* 属（真正蜘蛛目；ヒメグモ科）の1新種. *Acta arachnol.*, 32 : 37-42.

メダマグモの観察

棚 沢 新*

Observations on the Ogre Faced Spider, *Dinopis* sp.

Arata KURUMISAWA*

はじめに

メダマグモは熱帯系のクモで、その特徴のある大きな目と、面白い捕虫法で有名なクモである。筆者は、このクモをメキシコ、モレロス州、ココヨックで採集した。標高は1000メートル以上あるが、とても暑いところだ。

筆者は、現在このクモを9頭飼育している。飼育には大型の水槽(40×60×30)に植物を植えたものを使用している。

クモの観察

■メキシコにて

クモを発見した場所は、道路の両側にある草原で、あまり人は立入らない場所である。クモをはじめて見つけたのは、午後11時頃で、その後1時間程度の採集で30個体以上確認できた。クモ

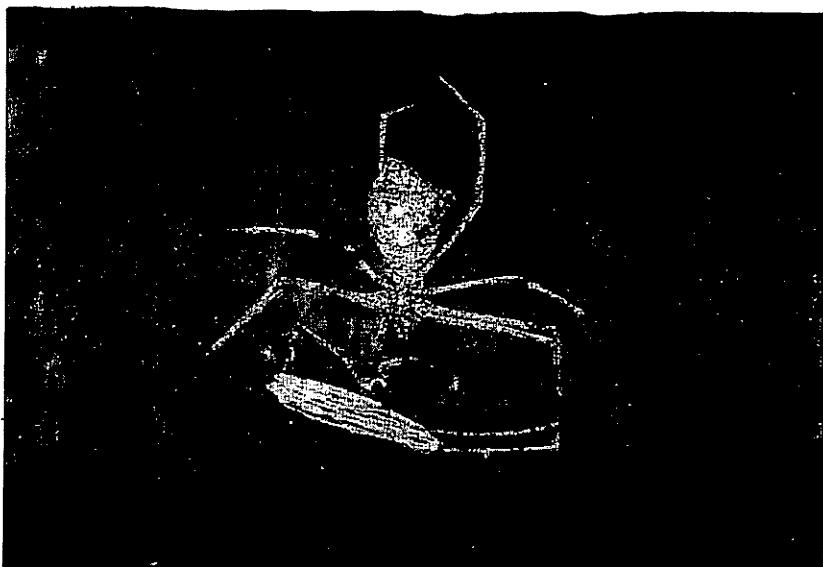


図1. 飼物を待つメダマグモ（背面より）

*〒113 東京都文京区千駄木5-5-5

は常に低い位置にみられた。図1のように餌を待っているものや、これから網をはりはじめるものなど、いろいろな状態が観察できた。また、餌をくわえているのに網をもっている奇妙な個体もいた。なぜ奇妙かと言えば、メダマグモの網は一回きりしか使用できないからだ。餌を待つ位置は、地面より5センチメートルほど上方なので、網はほとんど地上徘徊性のものか、あるいはその場に飛来した昆虫類と思われる。朝方、何時頃網をたたむのかなどは観察できなかった。

■自宅にて

クモが網をはる時間は一定しないが、5月7日から6月11日までの観察では、あたりが暗くなる午後7時から8時頃にはりはじめることが多かったが、午後5時頃作りはじめたものもいるし、真夜中になってようやく作りはじめたものもいる。網を作り始める時間は、個体によっても、同じ個体であっても、日によってばらつきがある。

クモは網をつくる時、体を捕虫の時とは逆向き（頭が上）にして行う。第1、2脚で体を支え、第3脚の離節で糸イボから出される糸をすく、そして第4脚でつくりかけの網をひきよせ、すかれた糸と網とを糸イボでつなぐのである（図2）。この動作のくりかえしにより網はできあ

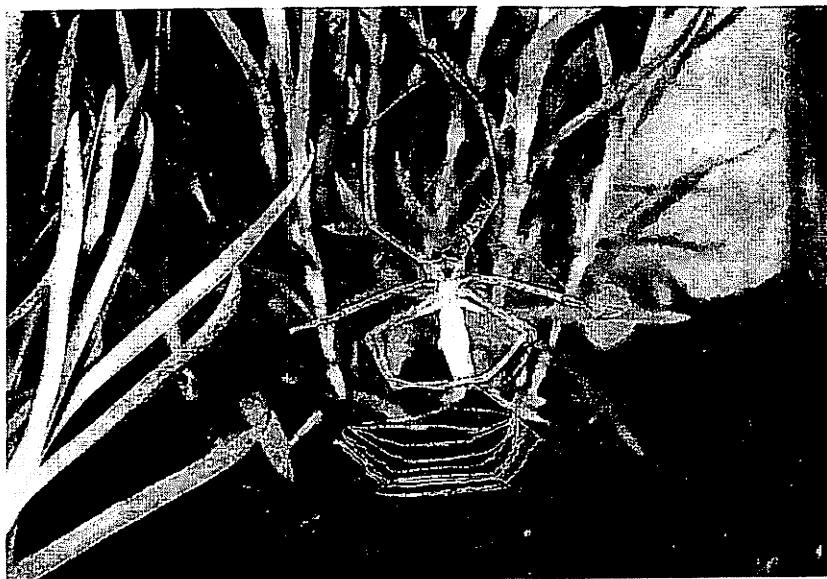


図2. 網を作るメダマグモ

がる。網を作る時、糸イボから出た糸が第3脚の離節ですかれると、太くちぢれる、この動作が網を伸縮自在にするポイントと思われる。離節の動きは、織機の筋の動きにたいへんよく似ている。クモは網が完成すると、網を2度3度と脚で広げ、出来具合を確かめる。クモが網を保持している時、網は小さく見えるが、この動作により広げられた瞬間の網は、もとの2~3倍ほども大きい。網の出来具合を確認したクモは、第1、2脚で網を保持し捕虫に入る。

餌の捕虫は、2通り観察した。上から網をかぶせて捕虫する方法と、網をすくうようにして捕虫する方法である。網をかぶせる方法は、地上を徘徊しているものによく使用するようだ。クモ

は、図1の姿勢で餌物を待つ、真下を虫が通過した瞬間に、クモは網を大きく広げそれを虫にかかるのである。捕虫の際、網が地面にぴったりくっつくことはない。僕の考えではあるが、粘着力のある網が地面に付くと砂粒も付着してしまい、食事に不便だからだろう。しかし、クモがこれを意識しているかどうかは不明だが、クモは餌までの距離を計算して網を投げているのではないかと思われる。

網をすくうように使う捕虫は、飛来する虫に使う、しかし前述した「網を上からかぶせて捕虫する」という方法も使用することがある。捕虫は完璧なものではなく、失敗することが多い。

メダマグモは、一般的に夜活動するクモで日中は休憩をしているが、日中もずっと捕虫をするものもある、しかし飼育環境の中でそうであってもはたして自然の中ではどうなのか、興味ぶかい。クモは朝になると網をたたんでしまう、たたんだ網は食べてしまう。この行動は空腹のクモによく観察される。満腹のクモは、たたんだ網をするかまたは、網をたたまずほうつておくこともある。たたまなかつた網は、翌日も続けて使用することが多かった。

メダマグモの卵のうは、直径60mmぐらいのこげ茶をした球形で、表面に落葉や、虫の死がいなどをつけてカモフラージュをする。飼育器内では一番高い場所に卵をつるしたが、自然環境では、この卵をどこに吊すのか興味ぶかい（図3）。

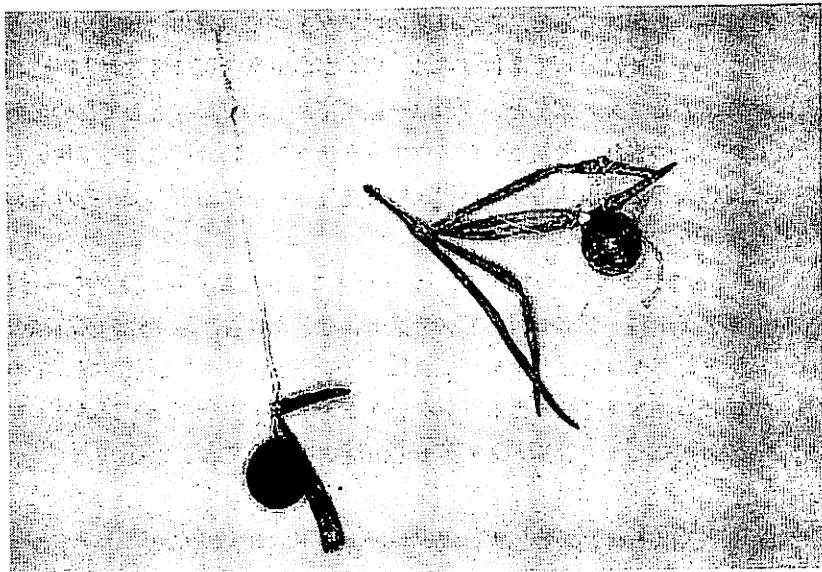


図3. メダマグモの卵のう

参考文献

中平 清, 1977. クモ. 160pp. 学研, 東京.

LEVI and LEVI, 1987. Spiders and Their Kin. 160pp. Golder press, New York.

トタテグモ類の生態 (1) 生活史

新海 明*

慶應大学日吉キャンパス内のトタテグモ類や冬虫夏草のクモタケについて調査をする過程で、トタテグモ類の生活史が普通のクモ類のそれと大変に異なっていることが判り、興味を持ち、文献の整理を始めた。ここでは、今までに調べられた日本産のトタテグモ類の生活史についてまとめたものを紹介する。

本稿をまとめるにあたり、新海栄一氏には文献の紹介と原稿の校閲をしていただいた。ここにお礼申し上げる。

トタテグモ類とは

トタテグモという名前は、岸上鎌吉が東京大学構内で採集した地中性のクモ（キシノウエトタテグモ）に対して与えた新称である。それ以前にはアゲトグモ（岩川, 1888）という名称がヨーロッパ産の地中性のクモに対して名付けられていたが、トタテグモはこれとは別種であり、またその頃に使われていたフクログモというのは一般名であるので新称としてこの名前をつけたという（岸上, 1889）。つまり、最初はキシノウエトタテグモという種に対して用いられていたものが、その後に同じような地中性のクモが相次いで発見されるによんで、それらのクモの一般名として定着したようである。

現在では、一般にトタテグモ類というのはハラフシグモ亜目に属すキムラグモ科とトタテグモ亜目のカネコトタテグモ科・ジグモ科・トタテグモ科などを含む、地中性のクモ類の総称である。ここでは、ハラフシグモ亜目とトタテグモ亜目のクモをトタテグモ類と呼び、そのうちの日本産の7種類、すなわちキムラグモ・カネコトタテグモ・エゾトタテグモ・ジグモ・ワスレナグモ・キシノウエトタテグモ・キノボリトタテグモの生活史についてまとめる。

〈キムラグモ *Heptathela kimurai* KISHIDA, 1923〉

6月下旬から7月上旬に産卵。卵数は24~75（平均53.6）。卵のうの外径17.5mm、高さ14.6mm。卵期は約1か月（大塚, 1963）。幼虫段階でフ化し幼虫期間（第1齢）は3日。第1回の脱皮で第1若虫になる。この第1若虫は翌春まで同胞と共に同居し、4月上旬に母グモの巣を出て独立生活を始める。幼虫期が短く、第1若虫期が非常に長い。若虫になってからの成長は緩やかで、脱皮は年1回（夏）とされる。雌雄とも6齢（推定）で成体になる（吉倉, 1983；1987）。オスの成熟は10月（八木沼, 1954）というものと、9月上旬に最終脱皮し9月25日に交尾した（沢口・王子, 1937）という報告がある。オスは交尾後まもなく死ぬ。メスは交尾の翌年（7齢）に産卵する。しかし、8齢まで生きているようだ。なお、メスは産卵後も脱皮を重ね、

*〒185 国分寺市本多1-6-6

産卵もする。沢口・王子（1937）によれば合計3回ぐらいは産卵するようだ（吉倉、1987）。

〈カネコトタテグモ *Antrodiaetus roretzi* (L.KOCH) 1877〉

9月には大きな巣穴（入り口の直径9mm以上）に子グモの同居が見られること、近縁種での繁殖期からみて、交尾期とそれに続く産卵期は7～8月と推定される。子グモは9月にフ化し、そのまま親の巣の中にとどまり越冬する。そして、翌年の春に巣を出て分散して自分の巣を造る。巣穴の大きさにして9mm以上のクモは繁殖できるようだが、飼育実験によると1年で9mmに達する可能性はない（大久保、1983；1988）。

〈エゾタテグモ *Anrodiaetus yesoensis* (UYEMURA) 1942〉

産卵期、卵数、卵サイズ、フ化時期・期間、成体になるまでの期間、繰り返し産卵の有無など全く不明。わずかに以下のような記録があるのみ。

成体のオスは夏から秋にかけて徘徊し8月に強いピーク、9月に弱いピークがある。オスの徘徊は夜間に活発。幼体の分散は8月が中心である（諏訪、1975）。

〈ジグモ *Atypus karschi* DÖNITZ 1887〉

産卵期は7月から9月（新海・高野、1987）、8月下旬から9月（吉倉、1987）、9月（中平、1961；木庭、1958）とするものと、「繁殖期は」10月（小野、1988）とするものがある。卵数は150～200（吉倉、1987）、300～500（新海・高野、1987）。卵のうは白色、卵形で長径1.2cm、短径0.7cm。住居の底から4～5cm上方に吊り下げて、下端を糸で固定し壁に密着させる（吉倉、1987）。卵期は12日、幼中期は10日ほどでキムラグモより長い。幼虫は第1回の脱皮後すぐに若虫にならず、前若虫として約3週間を過ごし、第2回の脱皮でやっと第1若虫となる。これが、越冬して翌春の3月下旬に母グモの巣を出て独立生活を始める。母グモの巣を出た子グモは高い所へ登りバローニングで分散する（吉倉、1987）。桂（1975）は滋賀県で4月7日に50～70頭の子グモがバローニングするのを見ている。交尾のための雌雄の同居は6月下旬から8月中旬というものの（吉倉、1987）と、4月下旬に脱皮し成体となったオスがメスの巣に入った（細野、1943）という報告がある。

和歌山市でジグモの生活環を調査した青木（1983）によると、オスの成体は7月から8月にかけてメスの巣の中で交尾し、8月から9月にかけて産卵する。9月から10月にかけてフ化が起り、フ化した1齢は脱皮して2齢となり、親の巣の中で越冬して翌年4月頃より分散・定着し、定着した個体はその年に4齢まで進んで2回目の越冬をし翌年5齢となって交尾に参加する。しかし、個体によって餌不足などで発育が遅れ、2回目の越冬を3齢で、3回目の越冬を4齢で行うものもある。従って、1世代2年であるが、3年ないし4年を要する個体もあるという。また、成熟後も脱皮し、野外での最高齢は7齢くらいと考えられるとのことである。

〈ワスレナグモ *Calommata signatum* KARSCH 1879〉

1957年6月16日に埼玉県上尾において約100坪の畑から11匹のワスレナグモを採集。そのうちの8匹がメスの成体で、7匹は卵塊をもっていた。このことから、産卵期は6月中旬ころであろう。また、それより約10年前の6月3日に本種のゴッサマーを観察している。この場合の産卵は5月上旬頃とも考えられるが、6月中旬に産卵された卵がフ化したのちに親の巣の中に同居したまま越冬し、翌年の6月に巣立つとも考えられる（関口、1957）。卵のうは底からすこし上方の巣の壁に取り付けられる（関口、1957の図による）。オスは9月頃にメスの住居に移動（新海、1969）。1979年8月7・17日と1980年8月15日に広島にて団居を発見。バローニングした（浜村、1981）。

〈キシノウエトタテグモ *Latouchia typica* (KISHIDA) 1927〉

産卵は7月から8月（山本、1943）。牧（1987）は7月に産卵したのを、高橋（1975）は8月に卵のうを見ている。卵のうは底より少し高い所の壁に付着する（岸田、1921；山本、1943）。8月中旬フ化（牧、1987）。10月15日に親と同居している幼体がいた（高橋、1975）。3月1日に親の巣の中に子グモが同居していた。この体長は2.5mm（岸上、1889）。2齢幼体から地中に管状住居（直径2mm）を作成（牧、1987）。独立生活するもので最小個体は体長4mm（岸上、1889）。成体までの期間は約2年（8月20日から9月10日にかけて次々と雌雄とも脱皮して成体になった），その間に4～5回の脱皮をする（牧、1987）。オスは9月から10月にかけてメスの住居へ移動中のものが発見されることが多い（新海、1969； 笹岡、1989）。オスはその年の冬までに交接して死亡。メスは交接していれば翌3年目の夏（7月）に産卵する。メスは産卵後も脱皮をして3年以上生存する。飼育したメスの3個体が1987年7月から住居奥で静止してしまった。内2個体が卵のうを作成した（牧、1987）。

飼育によってキシノウエトタテグモの生活史を調べた牧（1989）によると、1984年5月に採集したメスの成体が同年7月に産卵し、8月になって出巣した子グモを飼育した。幼体は卵のう内で1回目の脱皮をしてから出のうする。この子グモは生まれた年に1回脱皮して越冬に入る。翌年の7月から10月にかけて1～2回の脱皮をして2回目の越冬にはいる。さらに翌年の5月から9月までに2回脱皮して雌雄ともにほぼ同時期に成体となった。脱皮の時期は各個体共にほぼそろっていたが、脱皮回数は必ずしも同じではない。交接は成体になった年に行われ、雌グモは翌年産卵し、産卵後も脱皮して長く生き続ける。一方、雄グモは交接後餌もほとんどとらずに、まもなく死亡するという。

〈キノボリトタテグモ *Ummidia fragariae* (DÖNITZ) 1887〉

8月から9月に産卵（中平、1961）。7月から8月に卵のうを1個作る（山川・熊田、1973）。卵のうはほぼ四辺形で平たく、長径約12mm、短径約10mm、厚さ約5mmである。何本かの糸で住居内に吊り下げられている。色は橙色（吉倉、1987），卵のうは白色で巣底にころがされている（中平、1961）。卵数は約60（吉倉、1987），30～130（中平、1961）。8月から4月まで幼生が親と共にみられる（中平、1961；山川・熊田、1973）。フ化直後のものは前幼虫で、2日

表1. 日本産トタテグモ類の生活史の比較

	産卵時期	フ化時期	母グモとの 同居期間	成体までの 脱皮回数と期間	交尾時期 ♂出現期	卵数
						(産卵回数)
キムラグモ	6月下旬～ 7月上旬	7月下旬～ 8月上旬	フ化後～ 4月上旬	5～6回 約5年間	9月～ 10月	24～95 (2～3回)
カネコトタテグモ*	7月～ 8月	9月	フ化後～ 翌春		7月～ 8月	
エゾトタテグモ			フ化後～ 8月			
ジグモ	8月下旬～ 9月	9月～ 10月	フ化後～ 3月下旬	4回 2～3年	6月～ 8月	150～200 or 300～500
ワスレナグモ*	5月～ 6月	7月	フ化後～ 8月上旬		9月頃	
キシノウエトタテグモ	7月～ 8月	8月	フ化後～ 3月	4～5回 2～3年	9月～ 10月	
キノボリトタテグモ	7月～ 9月		フ化後 4月上旬			30～130

*印の種類の生活史は筆者の推測を含む

後に第1回の脱皮をして、幼虫になる。そして、その後約4週間で第2回の脱皮をして、若虫になる（吉倉、1987）。

まとめと今後の課題

日本産の7種のトタテグモ類の生活史をまとめたものを表1に示す。

この表をみれば判るように、キムラグモ、ジグモ、キシノウエトタテグモの3種類の生活史は比較的よく調べられているが、他の4種類は生活史の多くの部分が判っていない。特に、エゾトタテグモについては全くといってよいほど不明である。トタテグモ類の生活史がこのように多くの点で不明なのは、地中性のクモで直接その生活を観察することができないことが最大の理由

であるが、我々クモ研究者が住居を見つけても掘りとり調査をあまりやってこなかったことも一因であろう。今後は掘りとりや飼育による観察をするとともに、ファイバースコープなどを巣内に挿入してVTRなどで直接記録することなども必要であろう。

引用文献

- 青木敏郎, 1983. 和歌山市におけるジグモ (*Atypus karschi* DÖNTZ) の生活環. 南紀生物, 25(1) : 43-48.
- 浜村徹三, 1981. ワスレナグモのまどいについて. *Atypus*, (79) : 26-27.
- 細野善熙, 1943. 蜘蛛の習性. 330p., 日新書院.
- *岩川友太郎, 1888. 蜘蛛の解剖及習性. 動物学雑誌, 1(3) : 68-73.
- 桂孝次郎, 1975. ジグモの飛行の一観察. *Atypus*, (64) : 6.
- 岸上鎌吉, 1889. とたてぐも. 動物学雑誌, 1 : 154-159.
- 岸田久吉, 1921. トタテグモ類の住居(二). 動物学雑誌, 33 : 109-118.
- 木庭 奏, 1958. 九州中・北部のキムラグモの生息分布. *Atypus*, (64) : 34-40.
- 牧 孝匡, 1987. キシノウエトタテグモ, 一生活史断片. トタテグモ, (30) : 9-12.
- 1989. キシノウエトタテグモの生活史. *Atypus*, (94) : 18-25.
- 中平 清, 1961. 高知県のクモ. *Atypus*, (23/24) : 27-60.
- 大久保光将, 1983. 巣集団の構成から見たカネコトタテグモの成長と個体群の構造. 茨城大学修士論文.
- 1988. 巣集団から見たカネコトタテグモの個体群構造. *Atypus*, (91) : 18.
- 大塚竜也, 1963. キムラグモの産卵. 採集と飼育. 25 (4) : 30-32.
- 小野展嗣, 1988. ジグモおよびキノボリトタテグモの原記載. *Atypus*, (91) : 23-24.
- 笹岡文雄, 1989. キシノウエトタテグモの交尾行動について. *Kishidaia*, (58) : 30-33.
- 澤口由吉・王子幸寛, 1937. キムラグモについて. *Acta arachnol.*, 2 : 115-123.
- 関口晃一, 1957. ワスレナグモ. 自然の観察, (2) : 5-7.
- 新海栄一, 1969. 東京都産真性蜘蛛類. 65p., 東亜蜘蛛学会, 大阪.
- , 高野伸二, 1987. クモ基本50. 128p., 森林書房, 東京.
- 諏訪良将, 1975. エゾトタテグモの生態. *Atypus*, (63) : 16-17.
- 高橋 登, 1975. キシノウエトタテグモに寄生する冬虫夏草について. *Kishidaia*, (39) : 36-37.
- 八木沼健夫, 1954. 日本産真正蜘蛛類概説. *Atypus*, (5) : 13-24.
- 山川 守・熊田憲一, 1973. 丹沢山塊の真正蜘蛛類. *Atypus*, (60) : 31-54.
- 山本 隆, 1943. 蜘蛛の観察. 79p., 朝陽社.
- 吉倉 真, 1983. キムラグモの性徴. *Heptathela*, 2(3) : 63-73.
- 1987. クモの生物学. 613p., 学会出版センター, 東京.

*は直接参照していない

徘徊中のキシノウエトタテの♀を採集

笹岡文雄

1991年5月13日午前0時30分、徘徊中のキシノウエトタテ *Latouchia typica* ♀幼体を、自宅（東京都豊島区）の浴室内で採集した。またさらに6月30日午前0時30分、同じ場所で今度は♀成体を採集した。キシノウエトタテは♂の徘徊が9~10月に見られる。♀は今のところ徘徊するという報告を知らない。ただ飼育下においては♀でも突然住居から脱出することがあるので、自然状態においてもその可能性は否定できないと思われる。

5月13日の採集は雨天時であり、住居に水が侵入したためにそこを脱出し、徘徊していた可能性は否定できない。しかし6月30日については前一両日晴れており、周囲では散水などもなかった。したがってこの2例だけでは♀も通常徘徊する性質があるか、またあると仮定しても5~6月がその時期にあたるかどうか断定できない。とりあえずここでは、一事例として報告しておく。

キシノウエトタテの寿命について

笹岡文雄

キシノウエトタテ *Latouchia typica* の生活史は、その土中生活性から現在も不明な点が多い。特に寿命については、いまのところ明確な報告がない。

筆者が現在飼育中の♀個体が、1991年5月現在10年目をむかえたので、とりあえず報告する。ただ飼育は営巣確認時より始めているため、実際の年齢はそれを越えていると思われる。更に1989年、飼育中行方不明になった♀の個体も、その時点で10年目をむかえており、この個体で2例目である。

また飼育はKISHIDAIA 58号の拙稿にある通り、盆栽に自然営巣したものに給餌する、という方法でおこなっている。気温などの生活環境は自然のままで、栄養状態だけをよくしたものである。

したがって自然状態では、ここまで生存する可能性は少ないと思われる。しかしながら種レベルとして♀は、10年間の生存が充分可能であることがわかった。

ハエトリグモの網膜の動きを見る

前川隆敏

1991年9月23日に神奈川県海老名市で採集したクモの幼体を、ルーペで見ていると、前中眼の色がひんぱんに変化するのに気がついた。この幼体はメガネアサヒハエトリの幼体のように思

えた。さらに背面からは、半透明な背甲を通して筒状の前中眼の内部（筒の底部には網膜があるという）が黒い影状に見え、網膜を左右に大きく動かすのがはっきり見えた。これまで、このようなハエトリグモの眼の内部の動きに気がつかなかったので驚いた。

他のクモでも頭胸部の色の淡い幼体では、はっきり見えるので、一度観察してみるとよいと思う。

ワキグロサツマノミダマシの破網

平松毅久

1991年8月2日、埼玉県入間郡日高町高岡でワキグロサツマノミダマシ *Nesconia melloittei* の♂が♀の網に交尾糸mating threadを引いて求愛中、突然♀が網をたたんでしまった。

CARICO (1986) は収網を速いパターン (Fast Removal Pattern) とゆっくりしたパターン (Slow Removal Pttern) の2つに大別した。前者はオニグモ亜科の *Acacesia hamata* での観察で、1. こしきからしおり糸を引いて下降、2. 片側の棒糸切断、3. もう一方の棒糸切断、4. 更に下降し、しおり糸を最下部の固定糸に接着、5. 反転してクモは上昇、網ははね上がる、6. クモは上昇を続け橋糸にしおり糸を接着。円網部は完全に崩壊、橋糸としおり糸によりY字状を呈する、7. クモは一方の側に橋糸と崩れた網を巻き取る、8. 方向転換して残りの糸を巻き取る——といった過程で、巻き上げブラインド方式とも呼ばれている。後者は *Cyclosa turbinata* で観察され、1. こしきから棒糸に向って動き、3~5本のタテ糸とそれに付着しているヨコ糸を寄せ集めて取り除く。このとき引いたしおり糸が新しいタテ糸となる、2. 1の過程を繰り返し、全捕虫域が除去される。最後に除かれるのが網の最上部で、棒糸と白帯はそのまま——この過程を別名雪かき式という。ワキグロの収網は前者で、正確には測定していないが、所要時間は約10秒前後と非常に短いものであったので、細かいところまでは確認できなかった。また、何故♂の求愛途中に突然収網を始めたのか謎である。時刻は午前1時頃で、同種が収網を行なうと思われる夜明けにはまだ時間がある。求愛拒否としてもわざわざ収網する必然性はない、何れにせよ1例のみの観察で偶発的なものと言う他ないが、巻き上げブラインド方式は夜行性（夜造網し、夜明けに収網）、雪かき式が昼行性（夜明けに造網、夜収網）というCARICOの見解に従えば、ワキグロの収網は前者であると考えてさしつかえないと思われる。

宿主の死骸を食べるイソウロウグモの幼体？

平松毅久

殺しか、はたまたスカベンジャーか？ クモ界きっての撲破りイソウロウグモの変わった行動を見る機会があったのでここに報告する。

DRAGLINES

時は1991年9月22日、所は京都市北区にある府立植物園。ツバキの枝の間に、体長4mm位のアシナガサラグモ *Linyphia longipedella* がドーム網をつくっていたが、よく見ると死んでおり、その死骸の右第4脚膝節に1頭、腹部末端に1頭計2頭の体長0.8mm位のイソウロウグモ sp.幼体（おそらくフタオイソウロウグモ *Argyrodes fur* と思われるが…）が食いついていた。約10分後にもう1頭が腹部後端に食いつき、計3頭となった。約30分後に先にいた2頭がほぼ同時に宿主の死骸から離れそうになったため、その2頭と宿主の死骸及びまだそれに食いついているもう1頭を捕獲した。3頭のイソウロウグモ sp.の幼体はそのまま飼育し、その間体長約0.3mmのオオヒメグモ *Achaearanea tepidariorum* 幼体を与えたが、10月10日午後11時頃、1週間前に冗談で入れておいたアカイエカ♀の死骸をいつの間にか1.5cmほど釣り上げ（飼育ケースの深さは2cm）、3頭のうちの1頭が食べていた。イソウロウグモは宿主の網にかかった餌を盗んだり、宿主に無視されるような小さい餌を捕食することが知られているが、餌が少なくなる秋頃には、小さな生餌がかかればそれを捕食（現に同じアシナガサラグモの網で体長1mmのDipteraを捕食するところも観察）し、宿主が死ねばその死骸を、少し大きめの餌がかかった場合は、宿主のいる場合その食べ残しを、宿主のいない場合は死んでからというように多彩な採餌戦略をとっている可能性がある。クモは生餌しか食べないという観念はイソウロウグモ類（と一般的にいうのははばかられるが）に関しては、あくまで基本的にそうであるとしかいえないのではないかだろうか。

シャコグモ、オオツリガネヒメグモをおそう

池田 泉

1991年5月28日20時36分、神奈川県中郡大磯町鷹取山の山麓、ササやぶの下、地表約15cmのオオツリガネヒメグモ *Achaearanea tabulata* の網にいたメスを、シャコグモ *Tibellus oblongus* のメスがくわえていた。くわえられた部分は腹柄で、シャコグモは腹側からかみついていた。この2頭は網内のかれ葉の下にいた。

なお、近くにオオツリガネヒメグモのオスとメスが同居している網もあった。
採集して確認したところ、すべて成体であった。また、オオツリガネヒメグモは腹部右背面に傷を負っていた。

神奈川県下のスズミグモを2例追加

池田博明

神奈川県下のスズミグモは、Kishidaia誌上で5例の報告がある。1980年横浜市港南区野庭町（谷川、1982），1984年小田原市曾我山と山北町尺里（浜口、1985），1989年平塚市上吉沢（磯部、1989），1989年弘法山（谷川、1989）。追加報告する。

1989年8月12日に足柄上郡大井町金子の最明寺前の住宅の生け垣にて（写真参照），池田博明が発見。特異な網形でスズミグモと分かったが，雌の幼体であった。

数日後姿を消した。

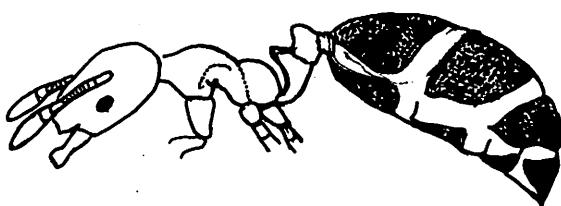
1991年7月22日午後，中郡大磯町虫窓にて，丸山一子氏が発見，同行した池田が確認した。この個体は雌の成体で腹背は真っ赤，肩の突起は銀色だった。網の上部にチリイソウロウグモがいて，網の下部には脱皮殻があった。宿主キラーであるチリイソウロウグモは採集した。卵のうを作るかどうかに興味があるので，雌成体はそのままにしたが，8月12日に確認したところでは，壊れた網が残っているだけで，卵のうは見られなかった。



脱皮中にアリに襲われたクサグモ

池田博明

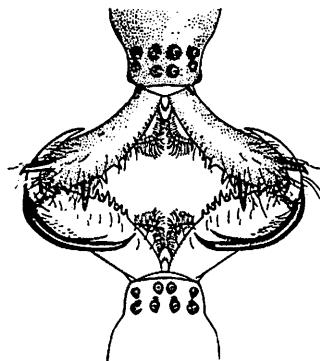
1991年7月22日14時，中郡大磯町虫窓にて，脱皮途中でアリに襲われ，瀕死状態のクサグモ雄成体を見た。脱皮中であったことは脚先が完全にぬけていなかつたことで分かった。アリはクモに群がっていた。クサグモの巣はウマノスズクサの葉間に作られていた。このアリは日本蟻類研究会の酒井春彦氏に同定していただき，ヒメアリ *Monomorium intrudens* であることがわかつた（図参照。体色は黄色で，腹部にはチョコレート色の縞がある。スケールは0.2mm）。酒井氏によると「ヒメアリは植物の空洞を巣として利用し，河原のススキ原の枯れた茎の中や農家に積んである竹の中などからよく発見される種類である。一つの巣には複数の雌がいて大きなコロニーとなる。越冬時だけは土の中で過ごし，春になると空洞へ移動する行動を取る。肉食性が強いのでクモを襲うのはうなずける」とのこと。



交尾で顎を使うヤサガタアシナガグモの雄

池田博明

1991年9月21日8:10、伊勢原市の水田で、交尾中のヤサガタアシナガグモを見た。交尾場所は雌の水平円網のこしき部の下であった。雌雄は腹面で接しており、雄は左の触肢を雌の右外雌器に挿入していく。雄の血のうが収縮する度に、雌の第1脚がピクッと動いた。8:12に雄の血のうの収縮が止まり、雄は触肢を雌の外雌器から抜いた。雌は動いて、両者はいったん分かれた。しかし、雄は再度接近を試みた。雄は脚を雌の脚にからませ、その後、顎を雌の顎の下から差入れて、からませた。この顎の様子はBRISTOWの『The World of Spiders』の図109（図参照）に出てるものと同じであった。雄はさらに雌に接近するが、雌は動いて両者は再び離れてしまった。



野外でもわかるハエトリの脱皮の兆候

前川隆敏・池田博明

ネコハエトリに脱皮が近づくと、次のような兆候が現れる。

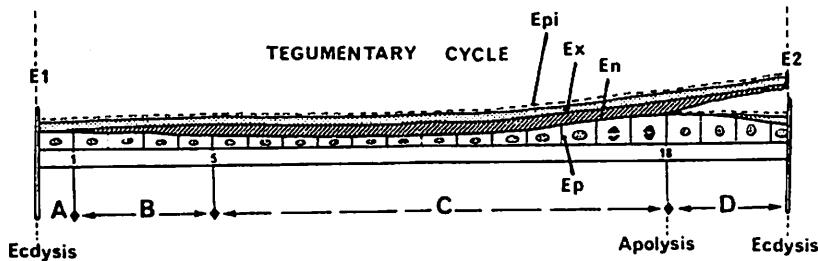
1.餌を食べなくなる、2.動作が鈍くなる、3.各歩脚のふ節が黒ずんでくる、1.2.の兆候については、他のクモでも知られていたが、3.についてはどうであろうか。

脱皮が近くない個体や脱皮がすんだばかりの個体では各脚のふ節は、ややオレンジがかかった半透明であって、決して不透明ではない。それが脱皮が近づくと不透明になり、黒っぽくなるのである。この変化は野外で脱皮の近い個体を選んで採集するのに大変に都合がよい。野外では葉上で、たいてい脚先を前へ出しているので、一見しただけで分かるからである。

黒ずむ理由について、ジャン・クロード・ボネリ (1987) の「脱皮ホルモン」の論文を参考

にすると、脱皮後から次の脱皮までの变化は図の通りである。なお、データは *Pisaura mirabilis* (日本のアズマキシダグモに近縁、結婚プレゼントで有名な種) のもの。

脱皮直後 (A期) は、上皮細胞 (Ep) の上にクチクラ外皮 (Ex) とクチクラ表皮 (Epi) が



のっているだけだが、次第に (B・C期) クチクラ内皮 (En) が発達する。C期の終わりにクチクラ分離 (Apolysis) が起こり、(D期) クチクラ内皮上皮細胞から分離する。すぐに上皮細胞の表面にクチクラ層が発達する。クチクラ分離後3~4日して脱皮 (Ecdysis) する。

体内で急にエクジステロンが増加してクチクラ分離が起こるのだ。

ネコハエトリの脚先が黒ずむ時期はこのD期に対応するようだ。黒ずむ変化は急に起こる (クチクラ分離) こともこの推定を裏付ける。古いクチクラと新しいクチクラで二重になり、その間に空間が出来るのである。

同様な変化は他のクモでも観察可能である。オスクロハエトリやメガネアサヒハエトリでも観察された。注意してみよう。

引用文献 BONARIC,J.-C.,1987.Moultting Hormones. IN Nentwig,W. ed.Ecophysiology of Spiders.Springer-Verlag.Berlin.111-118.

一吸い4頭

熊田憲一

1991年5月18日、川崎市多摩区にある生田緑地の林内の広場で地面を見ていたら、なにやら不可解な塊が動いているのが目についた。なんともぎこちなく、蟻が大きな虫を運ぶのに似た移動のしかたである。しかし、それがクモであることを直感し、素早く吸虫管で吸い上げた。さて何かな、と瓶内を覗いて驚いた。さっき吸虫管の中をきれいにしたばかりでカラッポのはずなのに、ウラシマグモ *Phrurolithus nipponicus* Kishida の雄が2頭と餌を捕らえたような雌が入っていた。ルーペで見ると案の定雌には雄が絡みついており、交接中であった。よく見ようとして瓶をクルクル回しているうちにこの雄は雌から離れてしまった。最初に見た変な塊はなんと1雌に3

DRAGLINES

雄が絡みついていたのであった。よく回りの地面を注意すると、落ち葉の上を歩く雄が所々に目にについた。どうやらウラシマグモの世界も人間界同様結婚難のようだ。おかげで一吸い4頭もの採集ができ、この一文をものにすることができた。

アメリカジガバチに狩られたクモ 一ハチに教えられた新産地—

谷川明男

東京港野鳥公園チーフレンジャーの上原 健氏より依頼を受け、アメリカジガバチ (*Sceliphron caementarium*) の巣の中のクモをみる機会があった。この巣は、東京港野鳥公園内で1991年6月30日に上原氏が採集されたものである。くずしてみると、この巣は6個の部屋から成り立っており、そのうち一部屋はからで、他の部屋にはハチの幼虫とともに、狩られたクモがぎっしりとつめこまれていた。5個の部屋からでてきたクモは次のとおりである。

- | | | |
|----|--|----------------------|
| 1. | ナカムラオニグモ <i>Araneus cornutus</i> | 雌幼体 6頭 体長 3.7~5.9mm. |
| | " | 雄幼体 8頭 体長 3.8~7.4mm. |
| | セキグチコガネグモダマシ <i>Larinia sekiguchii</i> | 雌成体 1頭 体長 7.3mm. |
| 2. | ナカムラオニグモ <i>Araneus cornutus</i> | 雌成体 2頭 体長 8.2~8.3mm. |
| | " | 雌幼体 5頭 体長 3.9~5.6mm. |
| | " | 雄幼体 1頭 体長 5.8mm. |
| | セキグチコガネグモダマシ <i>Larinia sekiguchii</i> | 雌成体 1頭 体長 8.5mm. |
| | ドヨウオニグモ <i>Neoscona adianta</i> | 雌成体 1頭 体長 5.9mm. |
| 3. | ナカムラオニグモ <i>Araneus cornutus</i> | 雌幼体 5頭 体長 3.9~6.4mm. |
| | " | 雄幼体 3頭 体長 4.0mm. |
| | | (2頭は計測不能) |
| | セキグチコガネグモダマシ <i>Larinia sekiguchii</i> | 雌幼体 2頭 体長 5.6~7.1mm. |
| | ドヨウオニグモ <i>Neoscona adianta</i> | 雌成体 1頭 体長 6.0mm. |
| | オニグモ <i>Araneus ventricosus</i> | 幼体 1頭 体長 5.7mm. |
| | ヤミイロカニグモの一種 <i>Xysticus sp.</i> | 雌幼体 1頭 体長 5.8mm. |
| 4. | ナカムラオニグモ <i>Araneus cornutus</i> | 雌成体 1頭 体長 7.9mm. |

" 雄成体 1頭 体長 5.7mm.
 " 雌幼体 9頭 体長 3.8~6.7mm.
 " 雄幼体 4頭 体長 5.0~6.2mm.
 セキグチコガネグモダマシ *Larinia sekiguchii* 雌成体 1頭 体長 8.9mm.

5. ナカムラオニグモ *Araneus cornutus* 雌成体 3頭 体長 7.0~8.0mm.
 " 雌幼体 9頭 体長 4.0~6.7mm.
 " 雄幼体 1頭 体長 6.1mm.

以上のように、5個の部屋からでてきたクモの総個体数は67個体であった。そのうちの58個体がナカムラオニグモで、全体の86.6%を占めていた。

ところで、セキグチコガネグモダマシの雌成体3頭、雌幼体が2頭含まれているが、これはセキグチコガネグモダマシの基準産地以外での初めての記録となる。当然のことながら東京都新記録でもある。この巣を作った母バチに新産地を教えられるということになった。

ハチに狩られたクモ その2

谷川明男

神奈川県綾瀬市深谷在住の秋山 守氏より、ハチの巣からでたきたクモだということで多数の標本をいただいた。秋山氏の話によると、1991年6月7日、自宅のテラスの梁に作られていたハチの巣（種および部屋の数は不明）を棒でかきおとすと、なかからたくさんのクモがでてきたので、つぶれてしまふものをのぞいて、全部を液浸標本にして持ってきてくださったとのことである。標本を調べてみると、サツマノミダマシ *Neoscona scylloides* の雌の幼体（体長4.8~8.5mm）が12個体、雄の幼体（体長5.9~8.0mm）が10個体、性別不明の幼体（体長4.2~4.8mm）が3個体、マルズメオニグモ *Araneus semilunaris* の雌成体（体長6.1mm）が1個体、コハナグモ *Diaeasubdola* の雌成体（体長6.2mm）が1個体であった。合計27個体のうち92.6%にあたる25個体がサツマノミダマシであった。

ヤサコマチグモの雄と雌

池田博明

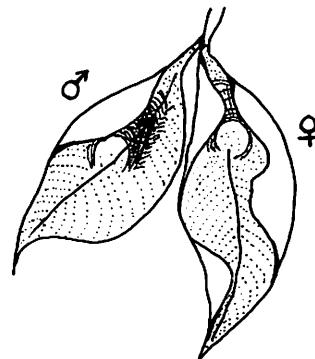
1991年6月18日、神奈川県中郡大磯町西小磯にて、ハコネウツギの枝先の葉を縦に丸めて作った筒状住居に、ヤサコマチグモ *Chiracanthium unicum* の成体雄がいた。すぐ隣りの葉には同様に筒状住居を作つてその雌がいた。この雌は亜成体であった。クモの体長は雄雌とも 6.0mm、住居の長さは約15mm であった。雌雄の住居は異なり、雌の方が糸が少なく、葉のかがり方も弱かった（図参照）。

まだ近くに同様の住居があるのでと思ひ、ハコネウツギの他の葉を探したが、ムナアカフクログモの成体雄1頭以外には、見つけることはできなかつた。ちなみに、ムナアカフクログモの雌もこの地域ではまだ亜成体であった。

同日に大磯町鷹取山生沢林道では、ヤサコマチグモの成体雌を採集しているので、雌の最終脱皮が近いと考えられる。成体雄は、雌の近くで最終脱皮を待つのだろう。ヤサコマチグモについては、すでに中平清が *Atypus* (64) で次のように報じている。「1974年8月14日、高知県春野町、庭木のルリヤナギの葉を縦に二つ折りにして住居を作つた♀と、それを訪れた♂を見る。♀はまだ若い。おそらく最後の脱皮に備えての住居であろう」と。大磯町の例は、季節が早いこと、雄が別に住居を作つていた点で異なつておらず、落葉樹の葉を縦折りする点で同じである。

このような雌雄の半同居を交尾前ガード戦略という観点から見直して、可能な限り記録していくよいように思われる。

例えば、1986年にニュージーランドのR.R.JACKSONは、15年の間に自分自身で野外で観察した雄成体と未熟な雌の同居例を整理して報じている (*J.Natur.Hist.*, 20:1193-1210)。この論文で報じられたクモはハエトリグモが72種、他の徘徊性種が27種、円網種25種、造網性無篩板類22種、篩板類14種、計158種である。コモリグモ科では同居の記録がない。ハエトリグモの例が多いのは、JACKSONの研究対象が主にハエトリだからであろう。この論文に挙げられたクモで日本に生息する種は、アダンソンハエトリ、チャスジハエトリ、ケアシハエトリ（ボルティア）、オオヒメグモのみである。もちろん日本と共通の属のものは大変多い。一般にフクログモやワシグモは二室の筒状住居 (dual-chamber tubular silk nest) を作るが。



ムシバミコガネグモは飛び降りない?

谷川明男

1991年8月2日および4日に和歌山県東牟婁郡那智勝浦町でクモの採集をしたときのことである。山道を歩いていると、たくさんのがガタコガネグモ *Argiope minuta* が網をはっていた。あるものはこちらがクモの存在に気づく前に飛び降りてしまうほど敏感で、大方のものもこちらが近づいたり、採集しようと手をのばしたりするとぼんと飛び降りて逃げてしまった。その敏感さに感心していたのだが、なかにいくつか鈍感なのがいて、採集しようとしても、飛び降りずに網の上方にあわてふためいて歩いて逃げていくのがいた。やはり個体によっては鈍感な奴や逃げ方の違う奴がいるものだなあと思いつながら採集をしていた。しかし、この時採集したクモを同定してみると、なんとコガタコガネグモのなかにムシバミコガネグモ *Argiope aetherea* がまざっていたのである。ムシバミコガネグモはコガタコガネグモよりずっと大きいと思い込んでいたので、採集しているときにはみんなコガタコガネグモだとばかり思っていたが、ここのムシバミコガネグモはコガタコガネグモとほとんど同じ大きさである。してみると、採集しているときにこいつは鈍感な奴だと思っていたのがムシバミコガネグモだったのではないだろうか。もはやいまとなってはどうしようもないのだが、この次の機会にはその真偽のほどをつきとめてみたい。

ポルティアの産室

谷川明男

1991年7月22日、沖縄県西表島の白浜近くの林内でポルティアハエトリ（ケアシハエトリ）*Portia fimbriata* の産室を二例観察した。いずれも林内の小道ぞいの巨大な岩のくぼみに作られていた。大きさは計測していないのだが、糸で作られた結構大きなのがのなかに枯葉をつるしており、枯葉の下面に卵のうが着けられていた。一方の母グモは、卵のうにしがみついていたが、もう一方の母グモはかごのすぐそば（かごの外）にじっとしていた。全体の感じはキヌアミグモの産室によくている。とてもハエトリがつくったとは思えぬほどのきれいなかごであった。

ホシミドリヒメグモの子育て行動

新海 明

最近になり、日本でも子育てをするクモが相次いで発見されている。

ホシミドリヒメグモ *Chrysso punctifera* (以下、ホシミドリ) がコガネヒメグモ *C. venusta* やギボシヒメグモ *Theridion rupulum* と同じように子育てをしているとの情報は、萩本房枝氏（私信）

DRAGLINES

によって以前から寄せられていたが、筆者も本種の子育て行動を初めて確認したので報告する。

観察は、1991年6月29日に静岡県駿東郡小山町須走において行った。発見したのは午後8時20分ころで、ホシミドリはアブラチャンの葉裏に造網していた。そして、子グモが80~90頭くらい出糞して母グモの周りにいた。そこで、本種の子育てを確認するために、餌としてショウジョウバエをその網にかけてみた(20:25)。母グモはすぐに餌に向かい、粘球糸を投げつけた後に糸で包んだ。そして、周りの糸を切り糸疣に吊りさげて葉裏の隠れ家(retreat)方向へ戻った(20:27)。隠れ家の下方2cmの所に餌を固定すると母グモは網の中を歩き回った。約3分間ほど歩いた後に餌に戻り、再び糸で包み直して餌を食べ始めた(20:34)。この間に子グモたちはじつとしたままで、一頭も動かなかった。その後、約30分ほど観察を続けたが、母グモが食べるだけで子グモたちは一頭も餌に接近しなかった(21:05)。これはダメではないかとも考えたが、子グモたちは餌捕獲後に暫くしてから反応することもあるので、そこで観察をひとまず中断した。

一時間後の午後10時に同じ場所に戻ったところ、やはり勘が的中した母グモと5~6頭の子グモたちが餌を食べているではないか。かくして、ホシミドリも子グモに餌を与えていることが判つたわけである。現在のところ、本種が「吐き戻し給餌」をするかどうかは確認していないが、していない可能性の方が大きいように思われる。

アシプトヒメグモの親による「開のう」の観察

新海 明

「開のう」とは「子が卵のう内での最後の脱皮をすませることにより活動能力がそなわったとき、母グモが卵のうを開ける行動」を言う(藤井, 1980:*Atypus*, (77))。

筆者は、アシプトヒメグモ *Anelosimus crassipes* の子育てを調べるために飼育していた卵のうを持った母グモが「開のう」したのを観察したので報告する。

観察は、1991年6月13日に自宅で飼育中の個体で行った。このクモは卵のうと共に同年6月11日に神奈川県中郡二宮町押切海岸にて採集してきたものである。飼育はフィルムケース内で行った。

開のうに気付いたのは午後12時15分で、アシプトヒメグモの親は卵のうのあちこちを咬みついていた。親グモは卵のうに口を当てて細かく咬んではひっぱり表面の糸を切っていた。切り口は主に片面に集中して行われていた。咬み切る時には卵のうの表面を触肢と第2・3脚でこきざみにたくように動かしていた。約1時間観察していたが、親グモは時々動きを止めることはあったが、ずっと開のうを継続した。その後、断続して観察を続けたところ、午後8時30分に子グモが4~5頭出のうしており、翌朝の午前7時にはほぼ全ての幼体が出のうしおわっていた。

ウツキコモリグモ *Pardosa astrigera* などの徘徊性のクモ類「開のう」行動が知られているが(藤井, 1980:*Atypus*, (77)), 造網性クモ類では筆者が知る限りでは全く報告がないのでここに記録した。

東京蜘蛛談話会 1988年度観察採集会報告

野津田のクモ

谷川明男*・熊田憲一**

1988年度の談話会観察採集会は、東京都町田市野津田で小峰光弘氏の案内で行なわれた。

町田市の野津田周辺に広がる多摩丘陵は、同じ東京の西部に広がる高尾山系や奥多摩とは景観が異なり、ここはなだらかな起伏の続く山村的な自然で、落葉広葉樹の二次林が柔らかく広がっている。行政区境の多摩市や八王子市側は既に多摩ニュータウンとして、コンクリートやアスファルトで作り換えられており、野津田側は貴重な自然保育地となっている。斎藤慎一朗氏と小峰氏の紹介でここを観察採集会の場所として選んだ。両氏は、自然保護活動を通じてこの地と長くかかわってこられている。

町田駅からバスで野津田車庫バス停に集合。小峰氏の奥様手作りの談話会の旗（幟）に迎えられる。丘陵上までの坂道は畠や農家、栗畠、赤土の露出した小さな崖などがあり、崖にはカネコトタケグモが多くいた。丘陵上は明るい畠地が広がり、丘は雑木林に覆われていた。都会の人々の田舎のイメージに近い環境であった。畠地はだいぶ放棄されており、草が生茂りクモにとって棲息環境が増えて良かったのかも知れない。しかしハナサラグモが沢山いた雑草地が次には刈り払われており、全くクモを見ることが出来なかった。畠や雑木林のように、人の手の入るところではクモも大変だと思う反面、適応環境が現れると、素早くクモが現れるほどクモの層が厚い状態が保たれていることに驚いた。

残念ながらここは町田市のスポーツ公園施設が計画されており、いろいろな施設が建設されることになっている。すでに工事が一部進められていた。

観察採集日と参加者（敬称は略す）

第1回 1988年5月22日

稲葉 茂代・板倉 泰弘・熊田 憲一・小峰 光弘・貞元 己良・高橋 祐子・谷川 明男・平松 毅久。

第2回 1988年7月24日

池田 博明・熊田 憲一・小峰 光弘・新海 栄一・吉谷 昭憲。

第3回 1988年10月23日

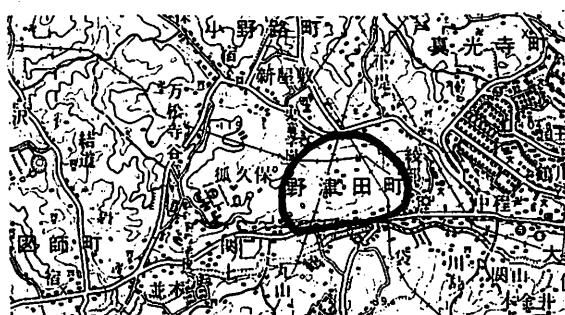
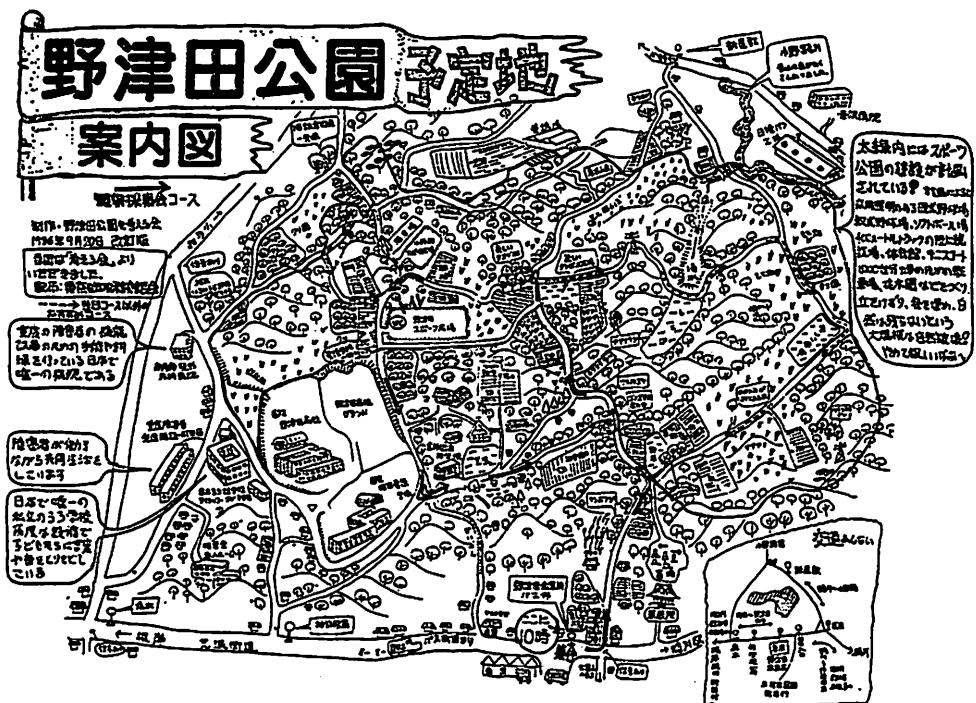
浅間 茂・池田 博明・稲葉 茂代・板倉 泰弘・小野 展嗣・加藤輝代子・熊田 憲一・理恵・宗幸・浩樹・由理・小峰 光弘・笹岡 文雄・佐藤 幸子・貞元 己良・新海 明・高橋 登・古浜 隆・本木 洋子・（このほか科学博物館や野津田の自然を守る会の方など4名が参加）

第4回 1989年2月19日

池田 博明・稲葉 茂代・板倉 泰弘・熊田 憲一・小峰 光弘・新海 明・高橋 登・谷川 明男・古浜 隆。

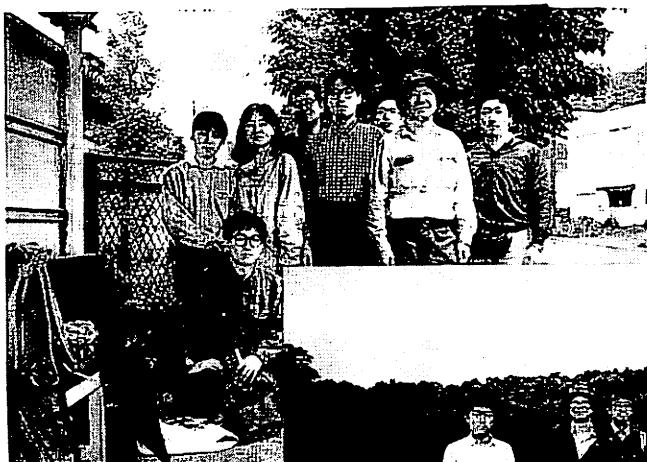
*神奈川県立野庭高等学校（〒223 横浜市港南区野庭町1660）

**〒221 横浜市神奈川区片倉町199

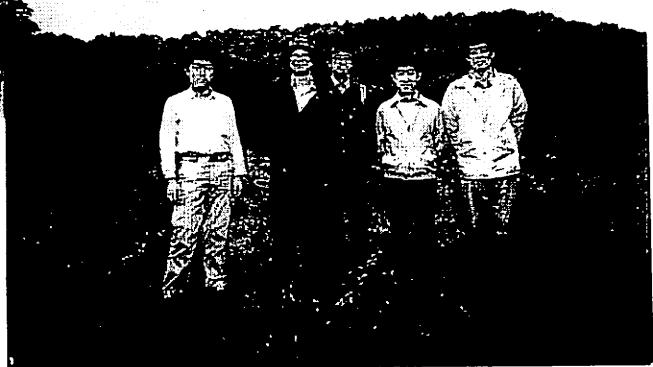




1988年10月23日



↑
1988年5月22日



1988年7月24日

目録および季別一覧

一覧に使用した記号は次のとおりである。M（雄成体），m（雄幼体），F（雌成体），f（雌幼体），y（性不明幼体），e（卵のう），d（脱皮殻），—（確認せず）。

			5月	7月	10月	2月
Antrodiaetidae カネコトタテグモ科						
1. <i>Antrodiaetus roretzi</i>	カネコトタテグモ		y	f	-	-
Atypidae ジグモ科						
2. <i>Atypus karschi</i>	ジグモ		F	-	-	-
Amaurobiidae ガケジグモ科						
3. <i>Titanoeeca albofasciata</i>	ヤマトガケジグモ		y	-	-	-
Uloboridae ウズグモ科						
4. <i>Miagrammopes orientaris</i>	マネキグモ		-	y	-	-
5. <i>Octonoba sybotides</i>	カタハリウズグモ		F	F	-	-
Pholcidae ユウレイグモ科						
6. <i>Pholcus crypticolens</i>	ユウレイグモ		FfMm	-	f	-
Theridiidae ヒメグモ科						
7. <i>Achaearanea angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ		M	-	-	-
8. <i>A. culicivora</i>	カグヤヒメグモ		FMy	F	f	-
9. <i>A. japonica</i>	ヒメグモ		y	FfM	-	-
10. <i>A. kompierenensis</i>	コンピラヒメグモ		-	F	-	-
11. <i>A. oculiprominentis</i>	キヨヒメグモ		-	fmy	-	-
12. <i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ		FMy	-	-	y
13. <i>Argyrodes cylindrogaster</i>	オナガグモ		Mm	My	fm	y
14. <i>A. fissifrons</i>	チリイソウロウグモ		-	F	y	-
15. <i>A. fur</i>	フタオイソウロウグモ		y	F	y	-
16. <i>A. nipponicus</i>	ツノナガイソウロウグモ		-	F	y	e
17. <i>A. saganus</i>	ヤリグモ		M	-	y	-
18. <i>Coleosoma octomaculatum</i>	ヤホシサヤヒメグモ		-	-	fm	-
19. <i>Comaroma maculosum</i>	ヨロイヒメグモ		-	-	-	M
20. <i>Dipoena mustelina</i>	カニミジングモ		m	-	FMfm	-
21. <i>D. okumae</i>	クロミジングモ		-	-	y	-
22. <i>D. punctisparsa</i>	シモフリミジングモ		-	-	-	f
23. <i>Steatoda cavernicola</i>	ハンゲツオスナキグモ		-	-	-	F
24. <i>Theridion chikunii</i>	バラギヒメグモ		F	-	-	-
25. <i>T. latifolium</i>	ヒロハヒメグモ		F	-	-	-
26. <i>T. lyricum</i>	シモフリヒメグモ		f	-	-	-
27. <i>T. sterninotatum</i>	ムナボシヒメグモ		-	-	-	m
28. <i>T. subadultum</i>	コケヒメグモ		f	-	-	-
29. <i>T. subpallens</i>	ハイイロヒメグモ		-	-	fm	-

5月 7月 10月 2月

Linyphiidae サラグモ科

30. *Bathyphantes tateyamaensis*

タテヤマテナガグモ

F - - M

31. *Diplocephaloides saganus* ハラジロムナキグモ

F - - -

32. *Floronia bucculenta* ハナサラグモ

- fm - -

33. *Gonatium japonicum* ヤマトケズネグモ

- - F -

34. *Linyphia albolimbata* ヤガスリサラグモ

FM - - -

35. *L. oideadicata* ヘリジロサラグモ

FM F y -

36. *Meioneta unguilata* ツメケシグモ

- M - -

37. *Nematogmus sanguinolentus*

チビアカサラグモ

F M - fm

38. *Ummeliata tokyoensis* トウキヨウアカムネグモ

- F FM -

Mimetidae センショウグモ科

39. *Ero japonica* センショウグモ

fm - - -

Theridiosomatidae カラカラグモ科

40. *Ogulnius pullus* ヤマジグモ

- F fM -

Mysmenidae コツブグモ科

41. *Mysmenella jobi* ナンブコツブグモ

- FM y -

Araneidae コガネグモ科

42. *Acusilas coccineus* ハツリグモ

Ff y - -

43. *Araneus abscissus* キザハシオニグモ

- y f -

44. *A. ejusmodi* ヌサオニグモ

m - y -

45. *A. mitificus* ピジョオニグモ

- y F -

46. *A. pentagrammicus* アオオニグモ

- - f -

47. *A. punctigera* コゲチャオニグモ

- - m -

48. *A. ventricosus* オニグモ

y y y f

49. *A. viperifer* カラオニグモ

- - y -

50. *A. viridiventris* ハラビロミドリオニグモ

- - y -

51. *Argiope bruennichi* ナガコガネグモ

- f - -

52. *Cyclosa argenteoalba* ギンメッキゴミグモ

FMy my Fy y

53. *C. atrata* カラスゴミグモ

fy F y -

54. *C. octotuberculata* ゴミグモ

FM - - f

55. *C. sedeculata* ヨツデゴミグモ

FfM Fy m -

56. *Cyrtarachne bufo* トリノフンダマシ

- - y -

57. *C. inaequalis* オオトリノフンダマシ

- - y -

58. *Hypsosinga sanguinea* シロスジショウジョウグモ

- - y -

59. *Metleucauge yunohamensis*

メガネドヨウグモ

- - y -

60. *Neoscona mellotteei* ワキグロサツマノミダマシ

- f - -

61. *N. scylla* ヤマシロオニグモ

y - - -

62. *N. scylloides* サツマノミダマシ

y F - -

			5月	7月	10月	2月
63. <i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ	Tetragnathidae アシナガグモ科	-	y	-	-
64. <i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ		-	FM	-	-
65. <i>L. subblanda</i>	コシロカネグモ		FfMm	-	-	-
66. <i>L. subgemmea</i>	キララシロカネグモ		-	F	y	-
67. <i>Tetragnatha praedonia</i>	アシナガグモ		-	-	y	-
68. <i>T. squamata</i>	ウロコアシナガグモ		f	-	y	y
		Urocteidae ヒラタグモ科				
69. <i>Uroctea compactilis</i>	ヒラタグモ		Ff	-	-	-
		Agelenidae タナグモ科				
70. <i>Agelena limbata</i>	クサグモ		y	-	-	-
71. <i>A. opulenta</i>	コクサグモ		y	f	-	-
72. <i>Coelotes corasides</i>	ヤマヤチグモ		-	-	F	-
73. <i>C. kitazawai</i>	アズマヤチグモ		-	-	F	-
		Hahniiidae ハタケグモ科				
74. <i>Hahnia corticicola</i>	ハタケグモ		-	-	M	F
		Pisauridae キシダグモ科				
75. <i>Dolomedes sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ		fy	-	y	y
76. <i>Pisaura lama</i>	アズマキシダグモ		-	-	y	fm
		Lycosidae コモリグモ科				
77. <i>Arctosa ebicha</i>	エビチャコモリグモ		-	-	-	M
78. <i>A. fujii</i>	フジイコモリグモ		M	-	f	m
79. <i>Lycosa coelestis</i>	ハラクロコモリグモ		F	-	-	-
80. <i>Pardosa agraria</i>	イナダハリグモコモリグモ		M	-	-	-
81. <i>P. astrigera</i>	ウヅキコモリグモ		F	M	Fmy	FFMm
82. <i>P. brevivulva</i>	ヤマハリグモコモリグモ		F	-	-	F
83. <i>P. laura</i>	ハリグモコモリグモ		FM	-	-	y
84. <i>Pirata tanakai</i>	コガタコモリグモ		-	Fe	-	-
85. <i>Trochosa ruricola</i>	アライトコモリグモ		-	-	-	fM
		Oxyopidae ササグモ科				
86. <i>Oxyopes sertatus</i>	ササグモ		m	-	y	-
		Clubionidae フクログモ科				
87. <i>Chiracanthium japonicum</i>	カバキコマチグモ		my	y	-	-
88. <i>Clubiona japonica</i>	ヤマトフクログモ		-	-	-	fMy
89. <i>C. kuriensis</i>	ヒメフクログモ		-	-	FM	FMy
90. <i>C. vigil</i>	ムナアカフクログモ		fm	FM	y	-
91. <i>Itatsina praticola</i>	イタチグモ		-	-	F	-
92. <i>Orthobula crucifera</i>	オトヒメグモ		y	-	-	-
93. <i>Phrurolithus nipponicus</i>	ウラシマグモ		FM	-	-	-
94. <i>Trachelas japonica</i>	ネコグモ		F	-	f	-

			5月	7月	10月	2月
Amyphaenidae イヅツグモ科						
95. <i>Anyphaena pugil</i>	イヅツグモ		-	-	-	M
Ctenidae シボグモ科						
96. <i>Anahita fauna</i>	シボグモ	fm	-	-	-	y
Heteropodidae アシダカグモ科						
97. <i>Heteropoda forcipata</i>	コアシダカグモ	f	-	-	-	-
Thomisidae カニグモ科						
98. <i>Bassaniana decorata</i>	キハダカニグモ	Fy	-	-	-	-
99. <i>Heriaeus mellotteei</i>	アシナガカニグモ	-	-	-	-	f
100. <i>Misumenops kumadai</i>	クマダハナグモ	-	-	-	-	y
101. <i>M. tricuspidatus</i>	ハナグモ	Ff	M	y	y	y
102. <i>Oxyptila nipponica</i>	ニッポンオチバカニグモ	F	-	-	-	-
103. <i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	FM	-	-	-	-
104. <i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ	y	-	-	y	-
105. <i>Tmarus rimosus</i>	セマルトラフカニグモ	y	-	-	-	-
106. <i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	F	-	-	-	-
Philodromidae エビグモ科						
107. <i>Philodromus auricomus</i>	キンイロエビグモ	M	-	-	-	-
108. <i>P. subaureolus</i>	アサヒエビグモ	f	-	-	y	-
109. <i>Thanatus miniaceus</i>	ヤドカリグモ	M	-	-	f	-
110. <i>Tibellus tenellus</i>	シャコグモ	Ffm	-	-	f	f
Salticidae ハエトリグモ科						
111. <i>Aelurillus festivus</i>	ヤマジハエトリ	-	-	-	-	f
112. <i>Carthotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	F	-	-	f	-
113. <i>Euophrys frontalis</i>	カタオカハエトリ	-	-	-	-	f
114. <i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	FM	y	-	-	M
117. <i>Harmochirus brachiatus</i>	ウデブトハエトリ	f	-	-	-	-
116. <i>Marpissa pulla</i>	ヨダンハエトリ	M	-	-	Fmy	F
117. <i>Myrmarachne japonica</i>	アリグモ	FM	-	-	y	-
118. <i>Phintella abnormis</i>	チャイロアサヒハエトリ	-	M	-	-	-
119. <i>P. linea</i>	メガネアサヒハエトリ	-	f	-	-	-
120. <i>Plexippoides doenitzi</i>	デーニツツハエトリ	y	-	-	-	-
121. <i>Plexippus setipes</i>	ミスジハエトリ	F	-	-	-	-
122. <i>Rhene atrata</i>	カラスハエトリ	-	-	-	y	-
123. <i>R. sp.</i>	ヒメカラスハエトリ	fMy	-	-	-	-
124. <i>Silerella vittata</i>	アオオビハエトリ	M	-	-	-	-

今回の観察採集会で野津田から5月・20科72種、7月・12科40種、10月・15科56種、2月・12科34種、総計25科124種のクモを記録した。

野津田の Locality Code : [C3927-3535]

東京クモ談話会 1990年度観察採集会報告

神武寺のクモ

熊田憲一*・谷川明男**

1990年度の談話会観察採集会は、神奈川県逗子市にある神武寺で行なわれた。

神武寺は神亀元年（724年）に開創された古刹で、一時は岩盤を切り開いて山中に八力院もの規模を持っていた。京浜地区から近く手頃なため、以前から昆虫や植物採集の好適地としても有名なところで、クモに関しても1940年の東亜（現在日本）蜘蛛学会誌に72種のクモが報告されている（町田・松下、1940）。その外は、三浦半島の真正蜘蛛類の中の主なものに神武寺の地名が付記されている（熊田、1980）。

談話会では1982年度に当地で会を実施したが、記録が残らなかったため、今一度会を催すこととした。よって、八王子城跡の2回目のときのような前回の記録との比較は行なっていない。

観察と採集は、京浜急行神武寺駅から中学校の横を通るハイキングコースで行なった。

神武寺周辺の丘陵地は近年宅地化が進み、ずいぶんと家が増えてしまつたが、山中は常緑広葉樹を中心とした安定した自然が見られた（米軍住宅建設で話題になった池子弾薬庫跡地とは隣接というより、一連の丘陵の中にある）。山頂付近にある神武寺も縁に囲まれているものの、南面する斜面には下から住宅がそのまま下まで迫っているのには驚かされた。

今回は、神奈川県新記録のイワテハエトリ（平松氏採集、松本誠治氏同定）が確認されたり、前回（1982年）記録されたドウシグモが同じ木で観察されただけでなく、稻葉氏の執念で境内広く、また1年を通して観察された。ワスレナグモ・ユノハマヒメグモも安定して棲息していることが確認された。このほかにも毎回観察に、採集にと日々有意義に過ごした。

観察採集日と参加者（敬称は略す）

第1回 1990年5月20日

稻葉 茂代・大石 征夫・大石 洋人・加藤むつみ・木村 知之・熊田 憲一・佐藤 幸子・
新海 明・高橋 登・谷川 明男・平松 級久・古浜 隆。

第2回 1990年7月22日

稻葉 茂代・加藤むつみ・木村 知之・熊田 憲一・熊田 宗幸・熊田 浩樹・
笹岡 文雄・佐藤 尚子・佐藤 幸子・平松 級久・古浜 隆。

第3回 1990年10月21日

安部代始子・池田 博明・板倉 泰弘・稻葉 茂代・大石 征夫・大石 洋人・加藤むつみ・
木村 知之・熊田 憲一・貞元 己良・佐藤 尚子・佐藤 幸子・新海 明・高橋 登・
高橋 祐子・田副 幸子・田副 啓子・谷川 明男・中島 晴子・永田 勝利・長井 芳夫・
平松 級久・古浜 隆・泉 勝弘・泉 ゆき子・泉 早緑・泉 肇吏。

*〒221 横浜市神奈川区片倉町199

**神奈川県立野庭高等学校（〒223 横浜市港南区野庭町1660）

第4回 1991年2月17日

安部代始子・小野 展嗣・加藤むつみ・笹岡 文雄・貞元 已良・佐藤 尚子・新海 明・鈴木 成生・高橋 登・谷川 明男・長井 芳夫・永田 勝利・平松 級久.



神武寺の位置とコース



↓ 1990年2月22日

↑ 1990年5月20日



1990年10月21日 ↓



目録および季別一覧

この目録は、当日現地で同定されたものと採集した標本に基づいて後日同定されたものとをあわせて集計したものであるが、目録中ではその区別はしていない。

一覧に使用した記号は次のとおりである。M（雄成体），m（雄幼体），F（雌成体），f（雌幼体），y（性不明幼体），e（卵のう），d（脱皮殻），n（巣），—（確認せず）。

		5月	7月	10月	2月
Antrodiacidae カネコトタテグモ科					
1. <i>Antrodiacetus roretzi</i>	カネコトタテグモ	-	-	F	n
Ctenizidae トタテグモ科					
2. <i>Latouchia typica</i>	キシノウエトタテグモ	-	-	n	n
3. <i>Ummidia fragaria</i>	キノボリトタテグモ	F	-	F	n
Atypidae ジグモ科					
4. <i>Atypus karschi</i>	ジグモ	-	F	-	-
5. <i>Calommata signatum</i>	ワスレナグモ	-	-	yn	F
Dictynidae ハグモ科					
6. <i>Dictyna felis</i>	ネコハグモ	-	y	y	-
7. <i>D. sp.</i>	ハグモの一種	-	f	-	-
8. <i>Lathys sp.</i>	カレハグモの一種	FM	m	-	-
Uloboridae ウズグモ科					
9. <i>Hyptiotes affinis</i>	オウギグモ	-	-	FMy	-
10. <i>Miagrammopes orientaris</i>	マネキグモ	-	F	y	-
11. <i>Octonoba sybotides</i>	カタハリウズグモ	FM	F	-	-
12. <i>O. varians</i>	ウズグモ	Ff	F	m	-
Oecobiidae チリグモ科					
13. <i>Oecobius annulipes</i>	チリグモ	-	-	-	F
Segestriidae エンマグモ科					
14. <i>Ariadna lateralis</i>	ミヤグモ	f	FM	f	y
Oonopidae タマゴグモ科					
15. <i>Gamasomorpha cataphracta</i>	ダニグモ	F	F	FM	-
Theridiidae ヒメグモ科					
16. <i>Achaeareana angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ	M	-	y	-
17. <i>A. culicivora</i>	カグヤヒメグモ	FMy	FfMy	-	-
18. <i>A. japonica</i>	ヒメグモ	y	FM	Fy	-
19. <i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ	FMy	FfM	Ffy	FM
20. <i>Anelosimus crassipes</i>	アシブトヒメグモ	M	FM	fmy	y
21. <i>Argyrodes bonadea</i>	シロカネイソウロウグモ	fm	FfMm	y	y
22. <i>A. cylindratus</i>	トビジロイソウロウグモ	y	-	y	-
23. <i>A. cylindrogaster</i>	オナガグモ	FM	My	fmy	-
24. <i>A. fissifrons</i>	チリイソウロウグモ	y	FM	Fy	-

			5月	7月	10月	2月
25. <i>A. fur</i>	フタオイソウロウグモ	FM	-	F	fmy	FM
26. <i>A. miniaceus</i>	アカイソウロウグモ	-	f	-	-	-
27. <i>A. nipponicus</i>	ツノナガイソウロウグモ	-	F	-	-	-
28. <i>A. saganus</i>	ヤリグモ	Fy	FfMme	fmy	f	-
29. <i>A. sp.</i>	ヤリグモの一種	-	FM	-	-	-
30. <i>Dipoena castrata</i>	ボカシミジングモ	f	-	y	-	-
31. <i>D. flavomarginata</i>	キベリミジングモ	-	y	-	-	-
32. <i>D. mustelina</i>	カニミジングモ	F	M	Ff	-	-
33. <i>D. mutilata</i>	コアカクロミジングモ	FM	-	f	-	-
34. <i>D. okumae</i>	クロミジングモ	m	-	-	-	-
35. <i>D. punctisparsa</i>	シモフリミジングモ	-	-	y	-	-
36. <i>D. sp.</i>	ミジングモの一種	FM	-	-	-	-
37. <i>Enoplognatha japonica</i>	ヤマトコノハグモ	-	-	-	-	F
38. <i>E. transversifoveata</i>	カレハヒメグモ	F	y	fmy	FMe	-
39. <i>Episinus affinis</i>	ヒシガタグモ	F	-	-	-	-
40. <i>E. mirabilis</i>	ハラナガヒシガタグモ	FM	-	f	-	-
41. <i>Pholcomma japonicum</i>	ヤマトカブトヒメグモ	-	-	m	-	-
42. <i>Phoroncidia pilula</i>	ツクネグモ	FM	-	FNm	-	-
43. <i>Steatodaca vernicola</i>	ハンゲツオスナキグモ	-	-	m	-	-
44. <i>Stemmops nipponicus</i>	スネグロオチバヒメグモ	F	-	-	-	-
45. <i>Theridion adamsoni</i>	サトヒメグモ	-	Ffe	y	-	-
46. <i>T. chikunii</i>	バラギヒメグモ	F	-	-	-	-
47. <i>T. sternotatum</i>	ムナボシヒメグモ	FM	F	my	y	-
48. <i>T. subpallens</i>	ハイイロヒメグモ	-	-	-	m	-
49. <i>T. yunohamense</i>	ユノハマヒメグモ	F	Fe	fm	-	-
	Nesticidae ホラヒメグモ科					
50. <i>Nesticus mogera</i>	チビホラヒメグモ	F	-	-	-	-
	Linyphiidae サラグモ科					
51. <i>Arcuphantes tamaensis</i>	タマヤミサラグモ	FM	-	-	-	-
52. <i>Bathyphantes tateyamaensis</i>	タテヤマテナガグモ	F	F	-	-	M
53. <i>Diplocephaloides saganus</i>	ハラジロムナキグモ	F	-	f	-	-
54. <i>Linyphia oidedicata</i>	ヘリジロサラグモ	FM	-	Fy	F	-
55. <i>L. yunohamensis</i>	ユノハマサラグモ	F	-	y	y	-
56. <i>Nematogmus sanguinolentus</i>	チビアカサラグモ	F	-	-	-	-
57. <i>Ummeliata tokyoensis</i>	トウキヨウアカムネグモ	FM	-	-	-	FM
	Mimetidae センショウグモ科					
58. <i>Ero japonica</i>	センショウグモ	y	Fe	fy	e	-
	Theridiosomatidae カラカラグモ科					
59. <i>Ogulnius pullus</i>	ヤマジグモ	F	-	-	-	-
	Anapidae ヨリメグモ科					
60. <i>Conoculus lyugadinus</i>	ヨリメグモ	y	Ff	my	-	-

		5月	7月	10月	2月
Araneidae コガネグモ科					
61. <i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	F	Fy	y	-
62. <i>Araneus mitificus</i>	ビジョオニグモ	-	f	y	-
63. <i>A. pentagrammicus</i>	アオオニグモ	F	-	fy	-
64. <i>A. uyemurai</i>	ヤマオニグモ	fmy	-	-	-
65. <i>A. ventricosus</i>	オニグモ	y	fM	-	-
66. <i>Argiope amoena</i>	コガネグモ	-	Fm	-	-
67. <i>A. boesenbergi</i>	チュウガタコガネグモ	-	-	y	-
68. <i>A. bruennichii</i>	ナガコガネグモ	-	y	F	-
69. <i>A. minuta</i>	コガタコガネグモ	-	FfM	F	-
70. <i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ	M	-	-	-
71. <i>C. laticauda</i>	キジロゴミグモ	-	-	y	-
72. <i>C. octotuberculata</i>	ゴミグモ	F	y	y	-
73. <i>C. sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ	FM	Ffy	fmy	-
74. <i>Meta reticuloides</i>	ヤマジドヨウグモ	Fy	fm	FM	-
75. <i>Metleuauge yunohamensis</i>	メガネドヨウグモ	F	fm	y	y
76. <i>Neoscona mellotteei</i>	ワキグロサツマノミダマシ	-	fmy	F	-
77. <i>N. nautica</i>	イエオニグモ	-	F	-	-
78. <i>N. scylla</i>	ヤマシロオニグモ	fy	F	-	y
79. <i>N. scylloides</i>	サツマノミダマシ	y	f	y	-
80. <i>Nephila clavata</i>	ジョロウグモ	-	y	FM	-
81. <i>Yaginumia sia</i>	ズグロオニグモ	F	Fy	-	-
82. <i>Zilla astridae</i>	サガオニグモ	F	-	fy	-
83. <i>Z. sachalinensis</i>	カラフトオニグモ	-	-	y	-
Tetragnathidae アシナガグモ科					
84. <i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ	FMm	FM	F	-
85. <i>L. subblanda</i>	コシロカネグモ	FfMy	-	Fy	-
86. <i>L. subgemmea</i>	キララシロカネグモ	-	F	-	-
87. <i>Tetragnatha maxillosa</i>	ヤサガタアシナガグモ	FM	-	y	-
88. <i>T. praedonia</i>	アシナガグモ	FM	Ff	Fy	-
Urocteidae ヒラタグモ科					
89. <i>Uroctea compactilis</i>	ヒラタグモ	fmy	Ffy	fy	y
Zodariidae ホウシグモ科					
90. <i>Doosia japonica</i>	ドウシグモ	FM	FMm	M	f
Agelenidae タナグモ科					
91. <i>Agelena limbata</i>	クサグモ	y	f	F	e
92. <i>A. opulenta</i>	コクサグモ	y	f	F	-
93. <i>Coelotes corasides</i>	ヤマヤチグモ	-	f	F	-
94. <i>C. exitialis</i>	ヤチグモ	-	-	F	F
95. <i>C. insidiosus</i>	シモフリヤチグモ	-	fy	-	-
96. <i>C. kitazawai</i>	アズマヤチグモ	-	-	F	-

			5月	7月	10月	2月
97. <i>C. luctuosus</i>	メガネヤチグモ	F	f	y	-	
98. <i>Cybaeus</i> sp.	ナミハグモの一種	-	-	-		F
	Hahniidae ハタケグモ科					
99. <i>Hahnia corticicola</i>	ハタケグモ	-	-	-		F
100. <i>Neoantistea quelpartensis</i>	ヤマハタケグモ	F	-	FM	-	
	Pisauridae キシダグモ科					
101. <i>Dolomedes raptor</i>	アオグロハシリグモ	y	y	fy	y	
102. <i>D. sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ	fy	Ffd	fy	y	
	Lycosidae コモリグモ科					
103. <i>Pardosa astnigera</i>	ウツキコモリグモ	FMe	F	y	FM	
104. <i>P. laura</i>	ハリゲコモリグモ	M	-	-	-	
105. <i>Pirata clercki</i>	クラークコモリグモ	FM	F	-	-	
106. <i>P. procurvus</i>	チビコモリグモ	-	F	-	-	
	Oxyopidae ササグモ科					
107. <i>Oxyopes sertatus</i>	ササグモ	my	F	y	y	
	Clubionidae フクログモ科					
108. <i>Chiracanthium eutittha</i>	アシナガコマチグモ	M	-	fy	-	
109. <i>C. unicum</i>	ヤサコマチグモ	-	Fe	-	-	
110. <i>Clubiona jucunda</i>	ヤハズフクログモ	-	F	y	-	
111. <i>C. vigil</i>	ムナアカフクログモ	f	-	y	M	
112. <i>C. yaginumai</i>	ヤギヌマフクログモ	fm	-	fmy	-	
113. <i>Itatsina praticola</i>	イタチグモ	fy	-	-	-	
114. <i>Phrurolithus komurai</i>	コムラウラシマグモ	y	-	F	-	
115. <i>P. nipponicus</i>	ウラシマグモ	M	-	y	-	
116. <i>P. pennatus</i>	ヤバネウラシマグモ	-	F	y	-	
117. <i>Trachelas japonica</i>	ネコグモ	-	-	f	y	
	Anypheenidae イヅツグモ科					
118. <i>Anyphaena pugil</i>	イヅツグモ	-	-	M	-	
	Ctenidae シボグモ科					
119. <i>Anahita fauna</i>	シボグモ	fmy	Fe	-	-	
	Heteropodidae アシダカグモ科					
120. <i>Heteropoda forcipata</i>	コアシダカグモ	-	d	-	-	
	Gnaphosidae ワシグモ科					
121. <i>Drassyllus sanmenensis</i>	エビチャヨリメケムリグモ	M	-	-	-	
122. <i>Zelotes pallidipatellis</i>	マエトピケムリグモ	-	-	y	-	
123. Gnaphosidae gen. et sp.	ワシグモの一種	F	-	-	-	
	Thomisidae カニグモ科					
124. <i>Bassaniana decorata</i>	キハダカニグモ	FM	fM	Ffm	y	
125. <i>Diae a subdola</i>	コハナグモ	Fm	-	-	-	
126. <i>Misumenops tricuspidatus</i>	ハナグモ	M	fy	FMy	-	
127. <i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	M	y	fmy	y	

			5月	7月	10月	2月
128. <i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ		y	Ff	y	-
129. <i>Tmarus piger</i>	トラフカニグモ		-	M	y	-
130. <i>T. rimosus</i>	セマルトラフカニグモ	fm	FfM	y	-	
131. <i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	F	y	-	-	
	Philodromidae エビグモ科					
132. <i>Philodromus spinitarsis</i>	キハダエビグモ	FM	Ffy	fmy	-	
133. <i>P. subaureolus</i>	アサヒエビグモ	fy	F	y	-	
134. <i>Tibellus tenellus</i>	シャコグモ	Ffmy	y	fm	y	
	Salticidae ハエトリグモ科					
135. <i>Carthotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	FM	-	fy	-	
136. <i>Euophrys iwatensis</i>	イワテハエトリ	FM	-	-	-	
137. <i>E. undulato vittata</i>	イナズマハエトリ	FM	-	-	-	
138. <i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	FM	-	-	y	
139. <i>Harmochirus pullus</i>	キレワハエトリ	-	-	my	-	
140. <i>Helicius cylindratus</i>	コジャバラハエトリ	-	-	f	-	
141. <i>Laufelia aenea</i>	エキスハエトリ	Ffm	F	-	-	
142. <i>Marpissa pulla</i>	ヨダンハエトリ	m	-	fy	-	
143. <i>Menemerus confusus</i>	シラヒゲハエトリ	F	FM	-	-	
144. <i>Myrmarachne innermichelis</i>	ヤサアリグモ	M	F	f	-	
145. <i>M. japonica</i>	アリグモ	fMy	F	Ff	y	
146. <i>Phintella abnormis</i>	チャイロアサヒハエトリ	y	-	-	-	
147. <i>P. castriesiana</i>	ワカバネコハエトリ	-	-	f	-	
148. <i>Plexippoides doenitzii</i>	デーニツツハエトリ	F	-	F	-	
149. <i>Rhene atrata</i>	カラスハエトリ	-	-	Ff	-	
150. <i>R. sp.</i>	ヒメカラスハエトリ	Ffy	M	y	-	
151. <i>Silerella vittata</i>	アオオビハエトリ	M	F	my	-	
152. <i>Yaginumanis sexdentatus</i>	ムツバハエトリ	F	F	F	y	

今回の観察採集会で神武寺から5月・26科103種、7月・21科80種、10月・26科101種、2月・20科40種、総計31科152種のクモを記録した。

神武寺の Locality Code : [C3936-3518]

引用文献

- 町田徳治・松下傳吾, 1940. 神奈川県神武寺附近産蜘蛛. *Acta arachnol.*, 5: 76-80.
熊田憲一, 1980. 三浦半島の真正蜘蛛類. *Kishidaia*, (45) 9-27

KISHIDAIA 掲稿規定

1. 掲稿資格は本会会員とする。ただし共著者には、会員以外の者を含むことが出来る。原稿依頼については、本会会員でなくとも、運営委員会の承認があればよい。
2. 掲稿内容は、クモや東京蜘蛛談話会についての論文、解説、記録、紀行文、感想などとする。
3. 原稿の採否については、運営委員会にて決定する。また、原稿に対して加筆・削除・修正などをお願いすることがある。
4. 頁数は図表を含めて、刷り上がり 8 頁以内とし、超過頁分は著者負担額となる。
(現状、一頁につき 2,500 円とするが、印刷費の変更等により、金額が変わることがある。)
5. 特別な費用を要する印刷は、その実費を著者負担とする。
6. 別刷は原稿の一項目の上部に、別刷の必要枚数および表紙の有無を赤字で記入する。
(別刷の金額は、全額著者負担とする。)

原稿作成上の注意

1. 原稿用紙は、市販の 400 字詰横書原稿用紙を使用してください。ワープロの場合には A4 サイズに 40~44 字×36 行を目安にしてください。
2. 学名などイタリック体を使用する場合には、その下に赤線を引いてください。
(学名の場合、属名と種名、それぞれに分けて赤線を引いてください。)
3. 写真は白黒にしてください。図は製図用インクなどにて、墨入れしてください。
4. 文章は 5 行目から書きはじめ、「1 行目にタイトルを 3 行目に著者名を書き入れてください。

(1989年 4月15日改正)

編集後記

キシダイア63号です。本号も前号につづいて豊富な内容になりました。会員の皆様から数多くのご投稿をいただきましてありがとうございました。このような充実した内容の会誌が発行できるのは、わが談話会の活動が活気を持っていることの証であると思います。そして当談話会のような同好会の活動が盛んになることは、日本のクモ学界の発展の礎になっていくものと確信いたしております。他のグループの動物、特に昆虫にくらべるとクモの研究にはまだ未知の分野がたくさん残されています。そんな未解決の問題を解きあかすのも最初の発端は小さな発見です。小さな発見の積み重ねの部分こそがキシダイアの持っている大きな存在価値ではないでしょうか。無限発展の可能性を持っている小さな発見。それを埋もれさせてしまうことはたいへんもったいないことです。ちょっと時間をさいて文章にし、発表しようではありませんか。編集担当はいつでも皆様からのご投稿を首を長くして待っております。

1992年・1993年度運営委員

池田 博明・稲葉 茂代・小野 展嗣・木村 知之・熊田 審一・笹岡 文雄・
新海 明・高橋 登・高橋 祐子・谷川 明男・萩本 房枝・平松 純久。

代 表：萱嶋 泉 191 東京都日野市多摩平7-15-9
本 部：小野 展嗣 169 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部
会誌編集：谷川 明男 223 神奈川県横浜市港北区新吉田町1523
通信編集：池田 博明 258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099
事務局（会計）：熊田 審一 221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199
郵便振替 東京 7-74885

会計監査：加藤輝代子・鈴木 成生

KISHIDAIA No.63 1992年11月15日印刷 編集者 谷川 明男
1992年11月16日発行 発行者 萩嶋 泉
発行所 東京蜘蛛談話会
東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部 小野 展嗣方

版下 (有)果報堂
印刷 イチカワ印刷所
〒357 埼玉県飯能市新町24-7

KISHIDAIA
Bulletin of Tokyo Spider Study Group

No.62 Nov. 1992

目次

鈴木 成生	東京都心北部におけるキシノウエトタテグモの生息分布調査	1
田副 幸子	セスジアカムネグモ、ユトガリアカムネグモ トガリアカムネグモについて	7
池田 博明	クモの幼体の記載 イナズマハエトリ、オスクロハエトリヒメタグモの出のう幼体	17
柳沢 新	メダマグモの觀察	23
新海 明	トタケグモ類の生態(1)生活史	26

DRAGLINES

鶴岡 文雄	徘徊中のキシノウエトタテの♀を採集	31
鶴岡 文雄	キシノウエトタテの寿命について	31
前川 隆敏	ハエトリグモの網膜の動きを見る	31
平松 翔久	ワキクロサツマイダニの破壊	32
平松 翔久	宿主の死骸を食べるイソワロウグモの幼体?	32
池田 泉	シャゴクモ、オホツリカネヒメグモをおそう	33
池田 博明	神奈川県下のスヌミグモを2例追加	33
池田 博明	脱皮中にアリに襲われたクサグモ	34
池田 博明	交尾で頭を使うヤサガタアンガグモの雌	35
前川 隆敏・池田 博明	野外でおかかるハエトリグモの脱皮の兆候	35
熊田 憲一	一吸い4頭	36
谷川 明男	アメリカンハチに狩られたクモ——ハチに教えられた新産地	37
谷川 明男	ハチに狩られたクモ——その2	38
池田 博明	イサコマチゴモの雄と雌	39
谷川 明男	ムシバニコガネは飛び降りない?	40
谷川 明男	ボルティアの産室	40
新海 明	ホシヒトリヒメグモの子育て行動	40
新海 明	アンブロヒメグモの親による「開のう」の觀察	41

観察採集会報告

谷川 明男・熊田 憲一	1988年度 藤津田のクモ	42
熊田 憲一・谷川 明男	1990年度 桐成寺のタモ	49
KISHIDAIA 投稿規定、原稿作成上の注意		57
編集後記		58